

中 恋 路 遺 跡 2

2014

公益財団法人 山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

なか　こい　じ　い　せき
中 恋 路 遺 跡 2

2014

公益財団法人 山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

序

本書は、一般県道宮野上山口停車場線単独道路改良工事に伴い、山口県防府土木建築事務所から委託を受け、山口県ひとづくり財団が実施した山口市宮野下に所在する中恋路遺跡発掘調査の記録をまとめたものです。

調査の結果、古墳時代の竪穴建物跡、古代・中世の掘立柱建物跡など、当時の集落に関係する遺構を確認することができ、当地域の歴史を知るうえで貴重な成果をおさめることができました。

本書が文化財保護に対する理解を深め、教育ならびに学術研究や郷土史理解の資料として広く活用されることを期待するものであります。

最後になりましたが、発掘調査の実施・報告書の作成にあたり、ご指導・ご協力いただいた関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成26年3月

公益財團法人 山口県ひとづくり財団
理事長 松永貞昭

例　言

- 1 本書は、平成25年度に実施した中恋路遺跡（山口県山口市宮野下地内）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は公益財団法人山口県ひとづくり財団が山口県防府土木建築事務所の委託を受けて実施した。
(契約名：一般県道宮野上山口停車場線単独道路改良（特定・指）工事に伴う埋蔵文化財調査業務委託 第1工区)
- 3 調査組織は、次のとおりである。
- 調査主体 公益財団法人山口県ひとづくり財団・山口県埋蔵文化財センター
- 調査担当 文化財専門員 米澤 昭信
- 文化財専門員 上田 克也
- 調査員 岩崎 麻衣子
- 4 調査にあたっては、山口県教育委員会、山口市教育委員会、山口県防府土木建築事務所ならびに地元関係各位から協力・援助を得た。
- 5 本書の第1図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図「山口」・「仁保」を複製使用した。第2図は、山口県防府土木建築事務所提供的地図を複製使用（一部修正）した。
- 6 本書で使用した方位は、国土座標（世界測地系）の北で示している。また、標高は海拔高度（m）である。
- 7 本書で使用した土色の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式による。
- 8 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。
- S B : 掘立柱建物跡 S K : 土坑 S P : 柱穴
- S I : 竪穴建物跡 S D : 溝
- 9 掘立柱建物跡実測図の薄い網かけは、柱痕跡を表わす。
- 10 出土遺物実測図中の土器の断面は、白抜きが土師器・陶器等、黒塗りが須恵器（古代まで）、薄い網かけが磁器を表わす。
- 11 図版中の遺構・遺物番号は、実測図の遺構・遺物番号と対応する。
- 12 報告書作成において、中国産輸入磁器については、上田秀夫氏（山口県立萩美術館・浦上記念館学芸顧問）・徳留大輔氏（同学芸員）・市來真澄氏（同学芸員）にご教示いただいた。
- 13 本書の作成・執筆は、米澤・上田・岩崎が共同で行い、編集は米澤が行った。なお、本文の執筆分担は、次のとおりである。

I 上田 II 岩崎 III 米澤・上田 IV 岩崎 V 米澤

本文目次

I	遺跡の位置と環境	1
II	調査の経緯と概要	3
III	調査の成果	5
1	基本層序	5
2	遺構	5
3	遺物	18
IV	まとめ	29

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の主な遺跡	1
第2図	調査区設定図	3
第3図	調査区土層図	5
第4図	竪穴建物跡実測図	6
第5図	掘立柱建物跡実測図①	9
第6図	掘立柱建物跡実測図②	10
第7図	掘立柱建物跡実測図③	11
第8図	掘立柱建物跡実測図④	12
第9図	検出遺構実測図①	14
第10図	検出遺構実測図②	15
第11図	検出遺構実測図③	17
第12図	竪穴建物跡・掘立柱建物跡出土遺物実測図	18
第13図	土坑出土遺物実測図①	19
第14図	土坑出土遺物実測図②	20
第15図	溝・柱穴出土遺物実測図	21
第16図	遺構検出時出土遺物実測図①	23
第17図	遺構検出時出土遺物実測図②	24
第18図	表面採集・表土除去時出土遺物実測図	25

表目次

表1	掘立柱建物一覧表	12
表2	出土土器観察表	26～28

図版目次

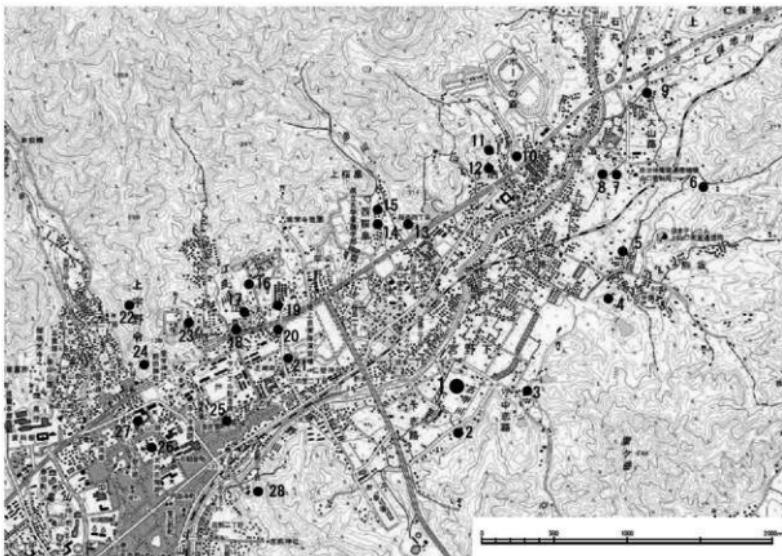
図版1	調査区遠景	図版8	SD04完掘状況 （北東から）
図版2	調査区近景		SD07遺物出土状況（北西から）
図版3	Ⅲ地区全景（合成写真一部修正あり）		SK08遺物出土状況（南から）
	Ⅲ地区（A地区・B地区）全景	図版9	SK15遺物出土状況（南西から）
図版4	Ⅲ A地区完掘状況（南西から）		SK04焼土出土状況（北西から）
	Ⅲ B地区完掘状況（北東から）		SK05遺物出土状況（南西から）
	Ⅲ C地区完掘状況（北東から）		SK10遺物出土状況（西から）
	Ⅲ D地区完掘状況（北東から）		SK23土層断面（西から）
	Ⅲ地区北東壁（A-B）土層断面 （北西から）	図版10	SK25・SK26・SK27・SD07堀込状況 （南東から）
	Ⅲ地区南東壁（C-D）土層断面 （南西から）		SK27遺物出土状況（南西から）
	Ⅲ地区北西壁（E-F）土層断面 （北東から）		SK27遺物出土状況（西から）
	Ⅲ地区南西壁（G-H）土層断面 （南東から）	図版11	SP040遺物出土状況（南西から） SP055遺物出土状況（南東から）
図版5	SI01完掘状況（北東から）		SP185遺物出土状況（東から）
	SI01掘込状況（北東から）		SP198遺物出土状況（東から）
	SI01掘込状況（北西から）		SP239遺物出土状況（南西から）
	SI01遺物（土器C・D・E） 出土状況（北西から）	図版12	出土遺物①
	SI01遺物（土器A）出土状況（北から）	図版13	出土遺物②
図版6	Ⅲ A地区掘立柱建物跡群 (SB01・SB02)（南東から）	図版14	出土遺物③
	Ⅲ C地区中央部掘立柱建物跡群 (SB05・SB06)（南東から）	図版15	出土遺物④
		図版16	出土遺物⑤
		図版17	出土遺物⑥
図版7	Ⅲ C地区北東部掘立柱建物跡群 (SB07・SB08)（南東から）	図版18	出土遺物⑦
	SB06（SP165）石出土状況（西から）		
	SB06（SP166）石出土状況（西から）		
	SB07（SP205）遺物出土状況（南東から）		
	SB07（SP205）土層断面（南東から）		

I 遺跡の位置と環境

中恋路遺跡は、山口県山口市宮野下中恋路に所在する。宮野地区は山口市北東部に位置し、北部は山陰側と瀬戸内側の両斜面の分水界をなす標高700m前後の鳳翶山地を境にして萩市と接している。北部、南部、東部の三方を標高100~250mの宮野丘陵で囲まれるなど、地区的多くを山地が占めており、その間に盆地状の低地と谷底平野がわずかに広がっている。盆地地形特有の霧の発生や降雪が多いが、全体的に温暖な気候である。地区中央を流れる樅野川の右岸地域は、北部の荒谷山地から下刻した丘陵裾に扇状地が張り出して、緩やかな傾斜地になっている。一方、左岸地域は、樅野川により形成された埋積性の谷底平野が広がっており、中恋路遺跡は、樅野川とその支流の古甲川の間に所在する。

遺跡名の「恋路」という地名については、「防長風土注進案」に「越道ノ里 今恋路ト作(かけ)リ」とあり、元々越道と表記されていたことが分かるだけで、名前の由来は記されていない。越道とは山越えの里という意味であり、仁保や大内方面へ通じる交通の拠点であったと考えられる。

宮野の歴史は縄文時代にまで遡ることができる。屋敷遺跡では前・後期の土器が出土し、桜畠遺跡では山口市内初の後期の竪穴建物跡が検出された。また、宮の前遺跡では、後期の円形竪穴建物跡と晩期の土坑が検出された。このように、右岸地域の丘陵裾の扇状地には遺跡が多く存在するため、人々の生活基盤がこの地にあったことが窺える。



1 中恋路遺跡 2 新城河内遺跡 3 古寺遺跡 4 熊坂遺跡 5 下岡遺跡 6 宮野河内遺跡 7 宮野岡の原遺跡 8 岡原古墳
9 大山路遺跡 10 宮の前遺跡 11 殿山古墳 12 上恋路古墳 13 桜畠遺跡 14 麻河内遺跡 15 上の山古墳群
16 初瀬遺跡 17 江良遺跡 18 屋敷遺跡 19 平野古墳 20 竹の花遺跡 21 三の宮古墳 22 七尾山城跡 23 七尾山古墳
24 八幡蒸跡 25 大道寺遺跡 26 大内氏館跡 27 築山館跡 28 古熊遺跡

第1図 遺跡の位置と周辺の主な遺跡

弥生時代の主な遺跡としては、古墳時代との移行期にあたる終末頃の築造と考えられる方形台状墓が検出された右岸地域の丘陵にある上の山古墳群が挙げられる。左岸地域でも平成23年度に当センターが発掘調査を行った本遺跡の調査で、中期の推定直径4.5mの竪穴建物跡が検出されている。

古墳時代になると、右岸地域の丘陵に殿山古墳、屋敷古墳、七尾山古墳など多くの古墳が築造された。集落跡については、左岸地域に山口市教育委員会が平成14（2002）年に実施した本遺跡の調査で、後期の8棟の竪穴住居跡が検出され、人々の生活が営まれていた可能性が考えられる。

大化の改新以降、古代の宮野は承平4年（934）ごろに編集された「和名類聚抄」によると神前郷と呼ばれた。これは、当時、宮野にあった周防三宮の仁壁神社の社前に開けた地という意味であり、宮野という地名の由来と考えられる。「東大寺領宮野庄田畠等立券文」によると建久6年（1195）に宮野は周防国管理者である東大寺へ寄進され、「宮野庄」と呼ばれるようになったことから、平安時代以降に、東大寺の荘園として、条里制による農業開発が始まったことが窺える。古代の遺跡としては、左岸地域の洪積段丘上や丘陵裾などで遺物が発見され、湧き水や湿地を利用した水田耕作が行われていたと考えられる。

鎌倉時代後期になると宮野庄は、力を増してきた国府の在庁官人である大内氏が支配下に置いた。大内氏は海外貿易による収益や、鉱山開発で得た財力を背景に山口盆地に京都を模した街作りを進め、全国最大級の守護館である大内氏館や、その別邸の築山館を築くなど、約200年に渡って絶大な権力を握った。その大内氏と強い関連が窺える遺跡として、室町時代後期の寺社関連遺跡である初瀬遺跡があり、16枚の笠塔婆、輸入青磁や白磁、44点の京都系土器師皿が出土した。右岸地域の江良遺跡、庵河内遺跡でも、室町時代の輸入青磁や白磁が出土している。中世の集落跡では、前述の江良遺跡、庵河内遺跡、宮の前遺跡の他、桜島遺跡で、溝に開まれた方形区画内に建物群・井戸・広場などの複合構造が検出され、中世の集落構造を知る貴重な資料となった。また、左岸地域でも、広い平野や河川に恵まれていてこと、灌漑技術が進歩したことなどから、水田耕作がさかんに行われ、それに伴う集落が形成されたのではないかと考えられる。本遺跡でも平成23年度の調査で、26棟もの掘立柱建物が復元され、14～15世紀の集落跡であることが判明しており、また、近接する新城河内遺跡でも、14世紀代の掘立柱建物跡が検出された。

近世の宮野地区は大内氏滅亡後、ほとんどが毛利氏の直轄地となり、山口守護に属した。寛永2年（1625）の検地により、宮野庄は宮野村と呼ばれるようになり、藩の御蔵入地として水田開発が進んだ。明治時代には、宮野村は宮野上村と宮野下村に分かれた。その後、市町村制実施に伴い宮野村が誕生し、昭和16年に宮野村は山口市と合併し、その後も農業地域としての歴史を歩んだが、近年、山口市郊外の住宅地として宅地開発が進み、山陽と山陰地域を結ぶ交通拠点として、人口が増加し続けている。

〈引用・参考文献〉

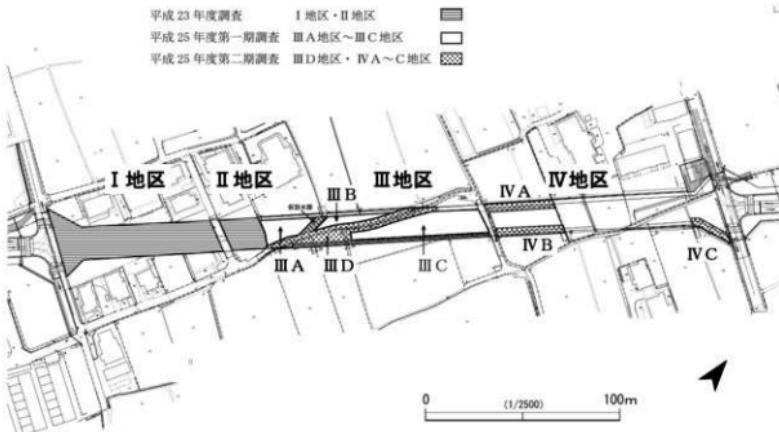
- 山口県教育委員会・山口県埋蔵文化財センター編『屋敷遺跡』建設省山口工事事務所・山口県教育委員会 1990年
山口県教育委員会・山口県埋蔵文化財センター編『桜島遺跡』建設省山口工事事務所・山口県教育委員会 1991年
山口県埋蔵文化財センター編『庵河内遺跡・上の山古墳群』山口県教育委員会 1994年 山口県文書館『防長風土注進案』第12巻 山口守護 上 1960年 山口県地方史学会『防長地下上申』第2巻 1979年 山口市教育委員会『初瀬遺跡』1994年 山口市教育委員会『山口市内遺跡細分布調査』『宮野地区』1996年 山口市教育委員会『新城河内遺跡 第一次調査』『山口市埋蔵文化財年報1』2002年 山口市教育委員会『宮の前遺跡』1995年 山口市史編集委員会『山口市史』山口市 1982年 田村哲夫編『宮野八百年史』宮野八百年史刊行会 1981年

II 調査の経緯と概要

一般県道宮野上山口停車場線単独道路改良事業に伴い、山口県山口土木建築事務所（当時）から、路線予定地内の埋蔵文化財有無についての照会があり、山口県教育委員会社会教育・文化財課は平成21年度11月に対象地の試掘調査を行った。

試掘調査の結果、柱穴等の遺構が密集して分布する状況が確認され、県教育委員会は本調査が必要である旨を回答した。そしてこの結果を受け、防府土木建築事務所（平成22年度より山口土木建築事務所と統合）は財団法人山口県ひとづくり財團・山口県埋蔵文化財センター（当時）に発掘調査を委託し、平成23年度に業務を実施した。この調査成果については、すでに『中恋路遺跡』（山口県埋蔵文化財センター調査報告第80集）として刊行されている。

平成25年4月1日付けで調査の委託契約が締結され、発掘調査届けの準備など各種手続きを進めていった。4月12日には防府土木建築事務所の担当者と現地で打ち合わせを行ったが、この際、調査予定範囲が、農業用水路によって分断されており、またその一部が耕運機の進入路として使用されていることが明らかとなった。この部分に関しては、収穫が終わる秋以降に調査を行うことで解決が計られ、委託者側との合意がなされた。この結果に伴い、空中写真撮影は2回行うことが決定した。調査区に関しては、23年度に、工事予定路線内の両脇に擁護壁を設置しており、それに伴う先行調査時にIII地区と命名していたため、用水路で分断された地形に合わせて、南西側からIII A・III B・III C・III D地区と細分した。III地区の北東部分をIV地区とし、同地区は23年度同様、擁護壁設置に伴う先行調査対象地であるため、各幅4mの範囲で行い、西側をIV A地区、東側をIV B地区、IV B地区の延伸部分をIV C地区とした。



連休明けの5月7日には調査事務所となるプレハブを設置し、翌日からは重機を用いた表土除去を開始した（第一期調査）。5月13日からは作業員を投入し、壁面の清掃や遺構検出作業に取りかかったが、これらの作業は6月中旬にはほぼ終了し、次いで遺構の掘込作業に入った。調査区は比較的水はけのよい土地柄のため、梅雨時期も作業の進行への影響は少なかった。また、こうした作業と併行して、個別図面の作成や写真撮影を行い、遺構の記録化を進めていった。8月7日、1回目の空中写真撮影を実施後、トータルステーションによるグリッド実測を行い、その後、調査の終了したⅢA・B地区は埋め戻し、第二期調査に備えてⅢC地区は一部埋め戻して、8月29日には第一期調査が終了した。



重機による表土除去作業



作業風景



空中写真撮影

9月からは、記録した図面の整理や、出土遺物の実測作業等を行い、報告書作成の準備を進めた。10月下旬、防府土木建築事務所から収穫の終了により第二期調査開始が可能になったという連絡を受け、11月8日より該当部分の表土除去を行った。翌週からは作業員による遺構検出を進めたが、この際、ⅣA・B地区から膨大な遺構が検出された。Ⅳ地区の調査成果は次年度以降の発掘調査成果と併せて報告する予定のため、本報告書では取り上げないことから、ⅣA・B地区に関しては水田部分のみの調査とし、残りはブルーシートで保護して次年度以降の調査に回すことが12月2日の防府土木建築事務所との協議で決定した。

調査期間中は悪天候に阻まれ、遺構密度の高いⅣA・B地区はもちろんのこと、密度の希薄なⅢD・ⅣC地区でさえ、一部を除いて水はけが悪いため作業の進行が若干鈍ったが、12月25日に2回目の空中写真撮影を実施し、その翌日にⅢD地区は防府土木建築事務所に引き渡した。擁護壁工事部分のⅣ地区も、翌年1月下旬には写真撮影や実測図作成等全ての現地作業が終了し、1月27日をもって現地引渡しが完了した。なおⅣ地区では、古墳時代の竪穴建物跡や、古代～中世の土坑、土坑墓、柱穴等を検出することができた。

その後、山口県埋蔵文化財センターにて、出土遺物の実測作業や写真撮影、検出遺構図面の整理等を行い、この報告書を刊行するに至った。

III 調査の成果

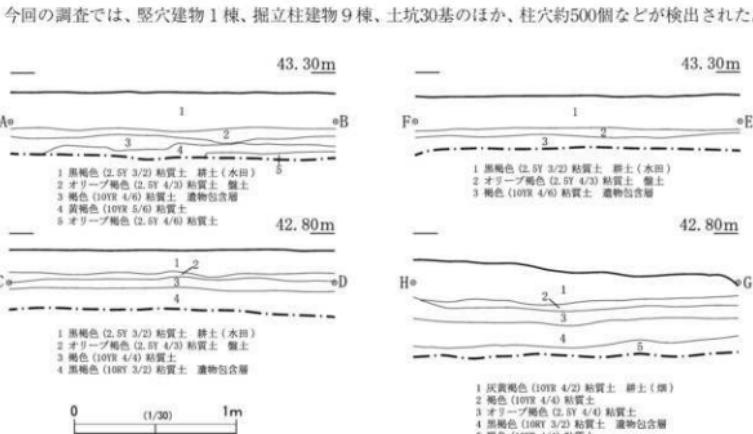
1 基本層序

今回は調査区をⅢ A～D の4地区に分け発掘を実施した。2年前に調査区の西側と東側に擁護壁を設置する工事を行っており、また、農業用水路に沿った部分は水路設置時に削平が行われているため、調査区全体の土層を確認することができなかったが、2年前の擁護壁工時実施時に、調査区の北東・北西・南東・南西の4か所約2mの範囲で土層を記録しておいた。第3図に示したのは、別添遺構配置図にA～Hまでの土層実測ポイントで示した部分の土層図である。

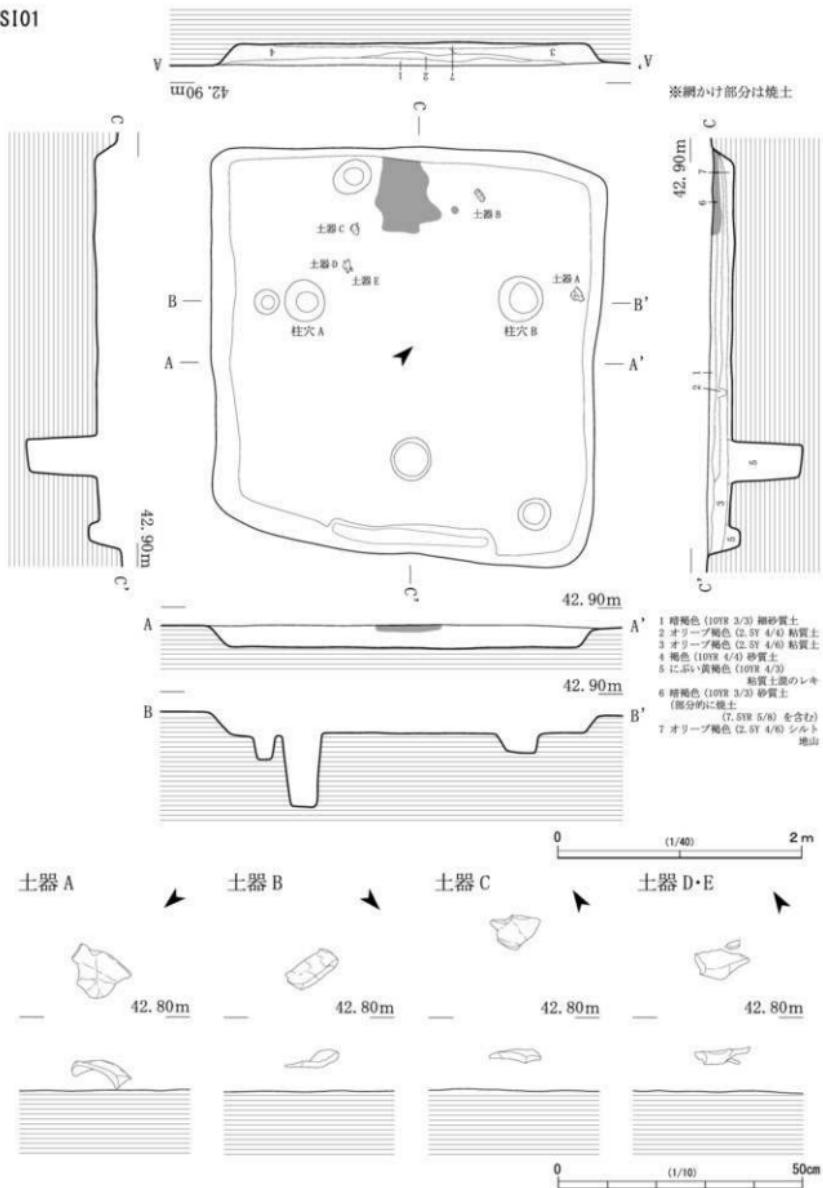
今回の調査区は周辺を水田で開まれている(第2図、図版1・2)ため、土層実測部四箇所のうち、A～B、C～D、E～Fの三箇所は、1層が水田耕作土(黒褐色粘質土30～40cm)、2層に盤土(オリーブ褐色粘質土5～10cm)、3・4層に遺物包含層(褐色・黒褐色粘質土10～40cm)、5層以下が遺構面(黄褐色粘質土)となる。また、南西隅のG～Hの部分は宅地の一部で畑耕作が行われていた部分であり、1・2層に畑の耕作土(灰黄褐色・褐色粘質土30～50cm)、3層に旧耕作地盤土(オリーブ褐色粘質土15～20cm)4層が遺物包含層(黒褐色粘質土25～30cm)、5層以下が遺構面(褐色粘質土)となっている。遺物包含層には主に中世後半の遺物が多く含まれているが、古墳後期から古代に比定される須恵器も少量含まれていた。

2 遺構

今回の発掘調査区で遺構の密度が高いのは、北東部側、農業用水路東側Ⅲ C 地区の部分であるが、2年前の調査区であるⅠ 地区の遺構密集区と比べると、全体的に遺構密度が低い。遺構の主なものは柱穴であり、掘立柱建物跡を構成するものと考えられるが、水路設置に伴う削平および、宅地の造園に伴う搅乱が進んでおり、構成柱穴として確定できる遺構は少なかった。



第3図 調査区土層図



第4図 竪穴建物跡実測図

その大部分は中世期の遺構と考えられるが、古墳時代や古代の条里制に伴うものと考えられる遺構も検出された。以下、主なものを取り上げ、説明を行いたい。

堅穴建物跡

S I O 1 (第4図 図版5) III C 地区の中央部やや北西より、SB06の北東、SK23の南に位置する。平面形は一辺が約4mの隅丸方形を呈する。遺構の最深部は35cm。南東側の辺縁中央付近に周溝が確認された。遺構検出時、北西側辺縁中央部付近に焼土の残存が確認されたが、堅穴建物床面にまで達しておらず、炉跡は確認できなかった。主柱穴は平面状では柱穴A・Bの二本柱と推測されるが、堀込深度が異なるため断定はできない。遺構西半の遺構埋土中から古墳時代後期に比定される土師器の甕（土器A・D・E 第12図・図版12:1）、須恵器片が出土した。また、表土除去時に検出遺構部分から、同じく古墳時代後期に比定される須恵器の高杯（第18図:104）が出土しており、同時期の堅穴建物跡と考えられる。

掘立柱建物跡

9棟の掘立柱建物が復元できた。（表1）内訳は、III A 地区に2棟、III B 地区に1棟、III C 地区に6棟である。平成23年度に本遺跡で復元された建物よりも棟数は少ないものの、規模が大きい建物が多い。棟方向には規則性が見受けられ、大別すると4つの方向がある。そのうち、長軸が西側に60°～70°傾く建物（SB01、05、07、09）と、東側に20°～35°傾く建物（SB02、04、08）は出土遺物から中世の建物に比定される。また、ほぼ東西・南北を向く建物（SB03、06）は、出土遺物から判断すると、古代の建物に比定される。構成柱穴に柱痕跡が確認できる建物は6棟あり、掘立柱建物跡実測図の柱穴に網かけで表示をした。（第5～8図）

S B O 1 (第5図 図版6) III A 地区南西部に位置し、SB02と重複する。規模は3間（7.4m）×3間（6.8m）、床面積50.3m²を測る。柱間平均は桁行約2.5m、梁行約2.3m。柱穴規模は直径18～48cm、深さは8.8～39.6cm。棟方向はN69°Wで、SB02とは棟方向が異なる。構成柱穴であるSP006から土師器杯（第12図:2）、SP013から土師器杯（第12図:3）が出土した。出土遺物から判断すると、中世の建物に比定される。

S B O 2 (第5図 図版6) III A 地区南西部に位置し、SB01と重複する。規模は3間（5.6m）×1間（2.6m）、床面積14.5m²を測る。棟方向はN27°Eである。柱間平均は桁行約1.8m、柱穴規模は直径26～36cm、深さは19.2～39.2cm。構成柱穴であるSP020から土師器杯（第12図:4）、SP026からは瓦質土器鍋が出土した。出土遺物から判断すると、中世の建物に比定される。

S B O 3 (第5図) III B 地区南西部、SK08の南部に位置する。規模は2間（2.9m）×1間（1.5m）、床面積4.3m²を測る。棟方向はN82°Eである。柱間の平均は桁行約1.5m。柱穴規模は直径46.0～59.0cm、深さは44.0～75.2cm。構成柱穴からは、土師器片や須恵器片が出土した。出土遺物から判断すると、古代の建物に比定される。

S B O 4 (第6図) III C 地区南西部に位置し、SK19上部をまたぐ形で位置する。規模は推定で2間（3.3m）×2間（1.2m※1間分）、床面積4.0m²を測る。棟方向はN32°Eである。柱間平均は桁行約1.7m。

柱穴規模は直径30.0~50.0cm、深さは18.8~55.6cm。建物北西方向に水路が走っており、その建設の際の削平によるため、北西部の構成柱穴を検出することができなかった。構成柱穴であるSP133から土師器碗（第12図：5）が出土した。出土遺物から判断すると、中世前期の建物に比定される。

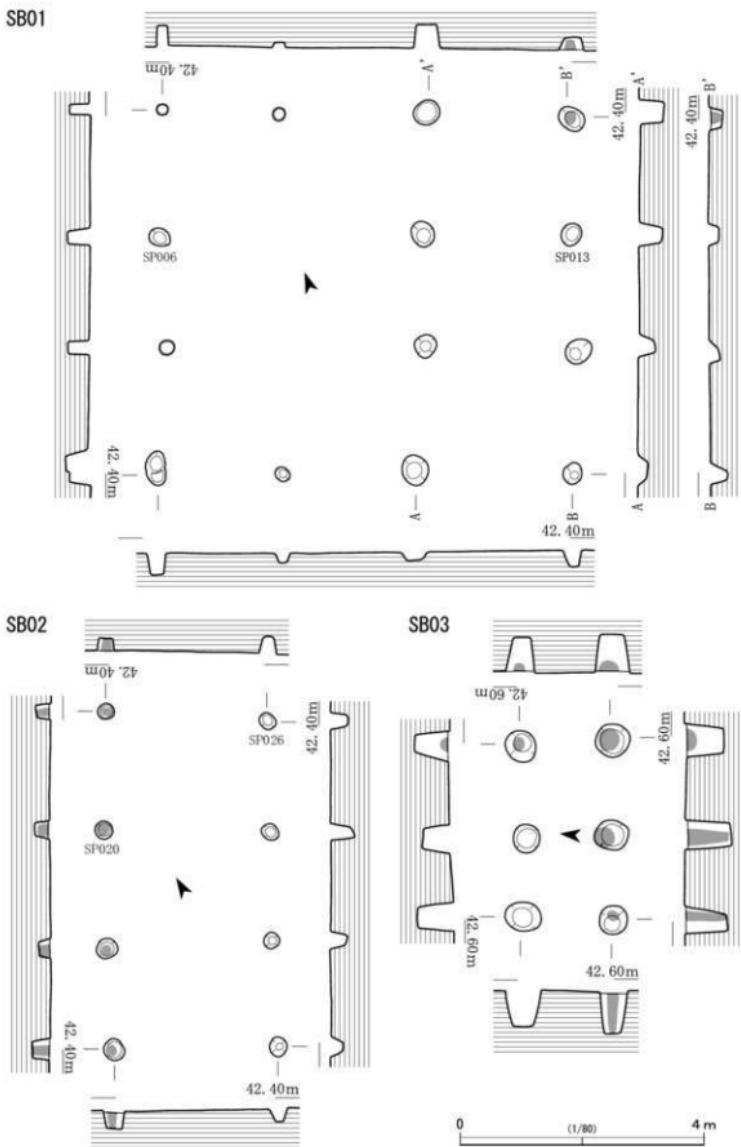
S B O 5 (第6図 図版6) III C 地区中央部からIII B 地区北東部にまたがり、規模は4間？(11.8m) × 4間(10.0m)、推定床面積118.0m²を測る本遺跡最大の建物である。棟方向はN65°Wで重複するSB06とは棟方向が異なる。建物北西部が調査区外のうえ、SB04と同様、水路建設による削平のため、北東方向の構成柱穴を検出することができなかった。建物内部のSP153を南西隅とした2間(4.4m) × 2間(2.4m※1間分)を身舎と考えた場合、その構成柱穴の規模が直径32~69cm、平均径47.8cm、深さが36.8~44.8cmに対し、外周柱穴の規模が直径30~46cm、平均径が38.4cm、深さが24~60cmと小さいことから、外周柱穴群を庇と仮定した場合、本建物は、四面庇建物である可能性が考えられる。構成柱穴であるSP153の上層部から折り重なる形で5つの石が出土した。また、SP150からは、土師器壺（第12図：6）が出土した。出土遺物から判断すると、中世の建物に比定される。

S B O 6 (第7図 図版6) III C 地区中央部、やや南西よりに位置し、SB05と重複する。規模は4間(7.8m) × 2間(4.8m)、床面積37.4m²を測る。棟方向はN3°Eで、ほぼ北を向く。柱間平均は桁行約2.0m、梁行約2.4m。柱穴規模は直径46~88cm、深さは26.4~65.6cm。構成柱穴のほとんどに柱痕跡が残存し、直径が15~25cmであり、底部から10~20cm大の石が出土している。SP173からは、柱痕跡の直上に15cmの大きさの2つの石が出土した。構成柱穴であるSP164から土師器杯（第12図：7）、須恵器杯蓋（第12図：8）、SP167から須恵器杯身（第12図：9）SP171から須恵器高杯（第12図：10）が出土した。出土遺物や、棟方向から判断すると、条里制との関わりが窺える古代の建物の可能性がある。また、隅丸方形の柱穴の掘り方や、柱痕規模は官衙的な建物に近い特徴を有している。

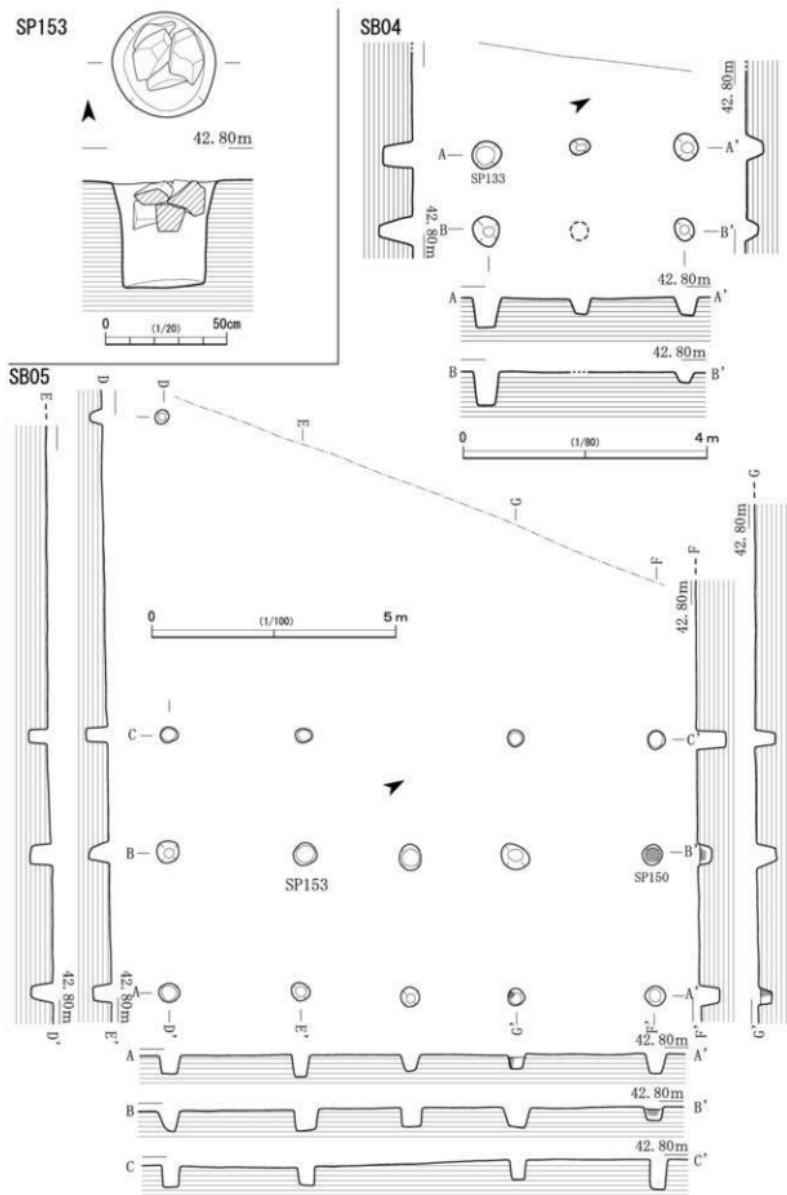
S B O 7 (第7図 図版7) III C 地区北東部に位置し、SB08と重複する。規模は2間(5.2m) × 2間(4.3m)、推定床面積22.4m²を測る。棟方向はN63°Wで、SB08とは棟方向が異なる。柱間平均は桁行約2.6m、梁行約2.2m。柱穴規模は直径26~56cm、深さは30.6~57.2cm。構成柱穴であるSP205の埋土上層部から、土師器杯（第12図：11・13・14）、土師器皿（第12図：12）、瓦質土器鍋（第12図：15）が出土した。また、柱穴の埋土上層部から下層部にかけて、石が投げ込まれており、建物廃絶時に埋められた可能性が考えられる。出土遺物から判断すると、中世前期の建物に比定される。

S B O 8 (第8図 図版7) III C 地区北東部に位置し、SB07と重複する。規模は3間(5.6m) × 1間(2.8m)、床面積は15.7m²を測る。棟方向はN23°Eである。柱間平均は桁行約1.9m。柱穴規模は直径32~50cm、深さは32.8~49.6cm。構成柱穴であるSP218からは、土師器皿（第12図：16）が出土した。出土遺物から判断すると、中世の建物に比定される。

S B O 9 (第8図 図版8) III C 地区北東端部に位置する。規模は2間(4.8m) × 1間(3.8m)、面積は18.2m²を測る。棟方向はN70°Wである。柱間平均は桁行約2.4m。柱穴規模は直径40~48cm、深さは40.8~50.4cm。構成柱穴からは、土師器片や焼土が出土した。出土遺物から判断すると、中世の建物に比定される。

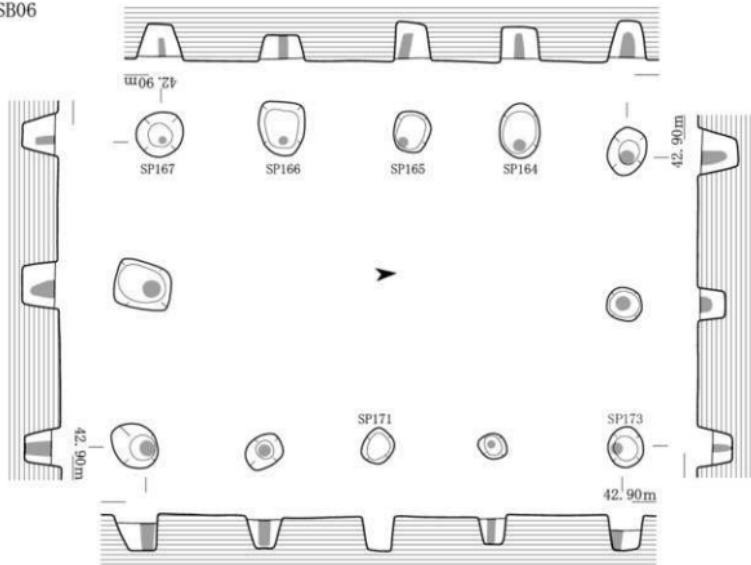


第5図 掘立柱建物跡実測図①

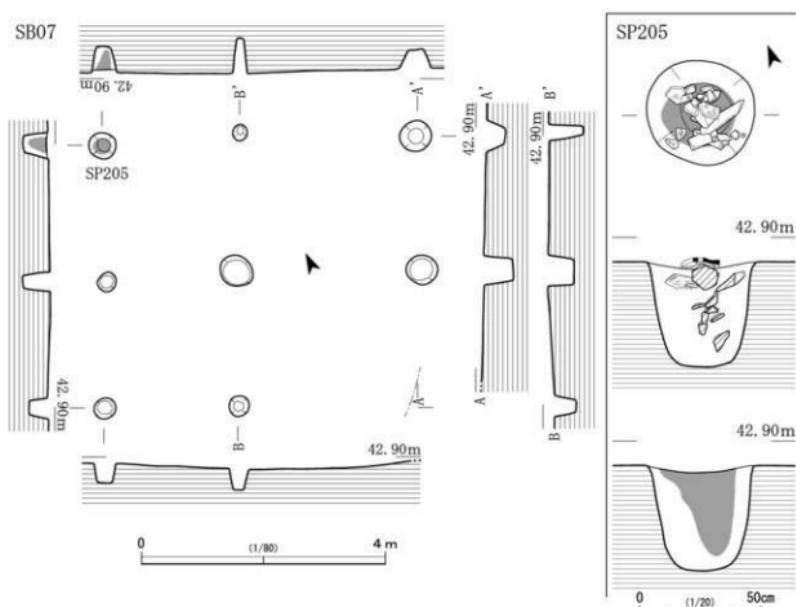


第6図 掘立柱建物跡実測図②

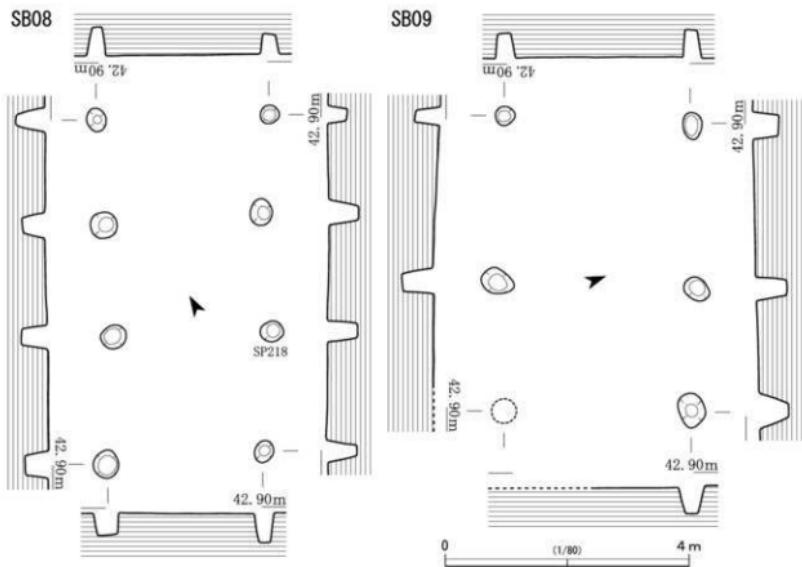
SB06



SB07



第7図 掘立柱建物跡実測図③



第8図 挖立柱建物跡実測図④

番号	番号 番号	規模 (間)	様方向	柱 間		面積 (m ²)	構成柱穴 平均径 (cm)	平均深度 (cm)	出土遺物 ※番号は報告書掲載の遺物 番号	柱頭部	時代	備考
				柱 行	梁 行							
1	SB01	3×3	N69°W	7.4 (19・24・31)	68 (30・17・21)	50.3	33.8	26.7	土師器杯(2) [SP006] 土師器杯(3) [SP013]	○	中世	-
2	SB02	3×1	N27°E	5.6 (2.0・1.9・1.7)	26	14.5	30.2	26.8	土師器杯(4) [SP020]	○	中世	-
3	SB03	2×1	N82°E	2.9 (1.4・1.5)	15	4.3	53.3	61.3	土師器、須恵器	○	古代	-
4	SB04	2×22	N32°E	3.3 (1.5・1.8)	*1.2	4.0	40.2	35.3	土師器椀(5) [SP133]	-	中世	*1間分のみ。 水路で削平のため一部不明。
5	SB05	4?×4	N65°W	11.8 (6.5・24・29)	*10.0 (2.7・23・2.2 ・2.8)	(118.0)	41.5	39.0	土師器甕(6) [SP150]	○	中世	*南西隅から。 一部調査区外。 水路で削平のため一部不明。
6	SB06	4×2	N3°E	7.8 (18・18・22 ・20)	4.8 (2.4・2.4)	37.4	68.9	54.1	土師器杯(7) 須恵器杯甕(8) [SP164] 須恵器杯身(9) [SP167] 須恵器高杯(10) [SP171]	○	古代	-
7	SB07	2×2	N63°W	5.2 (2.2・3.0)	4.3 (2.2・2.1)	(22.4)	39.6	41.5	土師器杯(11)土師器皿(12) 土師器杯(13) (14) 瓦質土器甕(15) [SP205]	○	中世	-
8	SB08	3×1	N33°E	5.6 (18・1.8・20)	28	15.7	39.0	43.0	土師器皿(16) [SP218]	-	中世	-
9	SB09	2×1	N70°W	4.8 (2.8・20)	38	18.2	43.0	46.5	土師器、焼土	-	中世	-

表1 挖立柱建物一覧表

土坑

30基の土坑を検出した。内訳はⅢA地区に5基、ⅢB地区に2基、ⅢC地区に15基、ⅢD地区に8基である。

SK04(第9図 図版9) ⅢA地区中央部、SB01の北隣りに位置する。長軸は123cm、短軸は117cmのほぼ円形を呈する。深さは最大で22cmである。埋土は3層に分層され、上層から黒褐色シルト、暗オリーブ褐色焼土、オリーブ褐色シルトである。埋土からは、土師器や須恵器、炭化物などが出土しているが、すべて小片であるため、時代の特定は難しい。第2層である焼土の範囲が長軸90cm、短軸50cmで、厚さが8cmある。地山には被熱痕は認められなかった。

SK05(第9図 図版9) ⅢA地区中央部、SK04の北隣りに位置する。長軸70cm、短軸50cmの楕円形を呈する。深さは最大で18cmである。埋土からは、土師器皿(第13図:23)、土師器杯(第13図:24・25・26)、土師器椀(第13図:27)、土師器片口鉢(第13図:28)が出土したため、廃棄土坑としての性格をもつのではないかと考えられる。出土遺物から判断すると、中世の遺構に比定される。

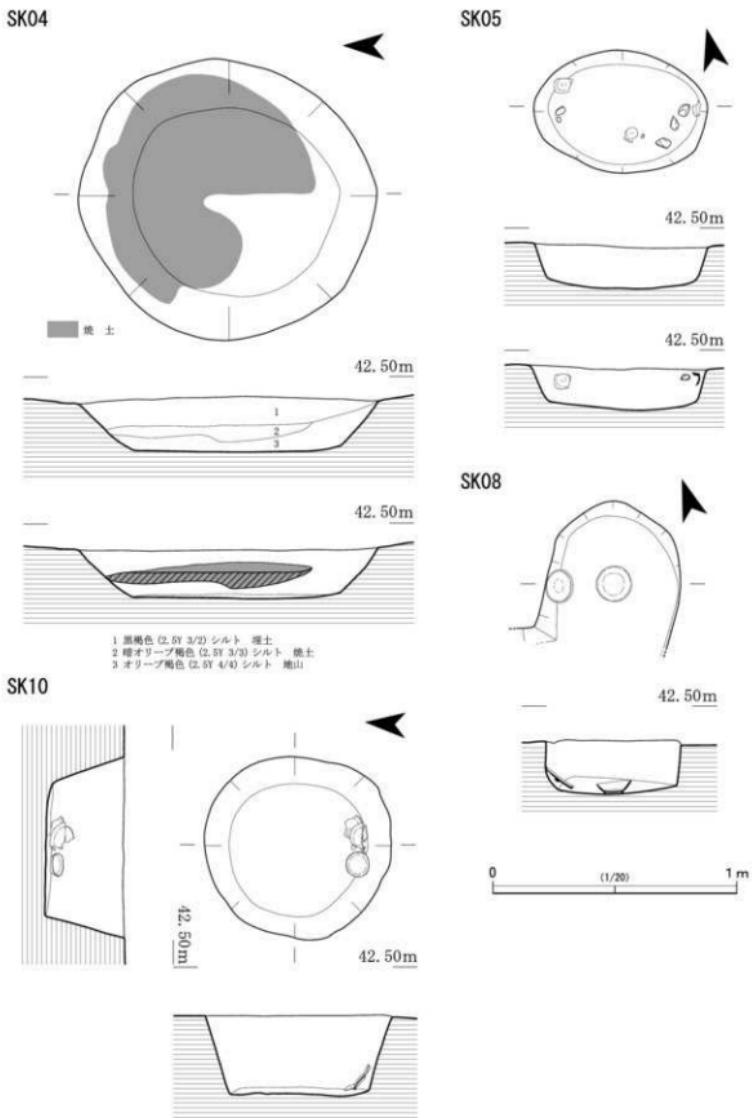
SK08(第9図 図版8) ⅢB地区南西部、SB03の北隣りに位置する。長軸212cm、短軸66cmの不整形を呈する。深さは最大で30cmである。埋土からは、完形の須恵器杯蓋(第13図:18)、須恵器杯身(第13図:19)が出土しているがセットとなるものではない。出土遺物から判断すると、8世紀前半～中頃の遺構に比定される。

SK10(第9図 図版9) ⅢD地区中央部に位置し、SK09、SK11に隣接する。長軸76cm、短軸74cmのほぼ円形を呈する。深さは最大で32cmである。埋土からは、土師器皿(第13図:20・21・22)が出土した。出土遺物から判断すると、16世紀前半頃の遺構に比定される。

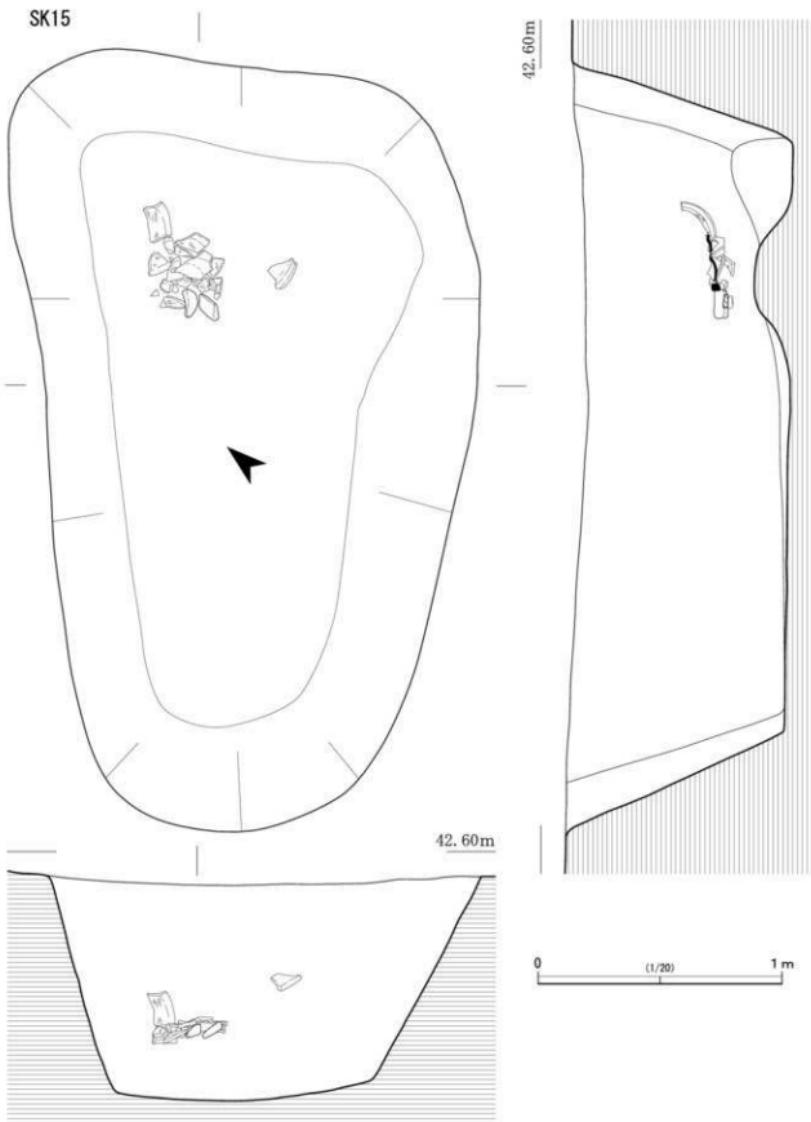
SK15(第10図 図版9) ⅢB地区中央部、SP25の北東隣りに位置し、長軸320cm、短軸177cmの不整形を呈する。深さは最大で90.5cmである。埋土は3層に分層され、上層から60cmの厚さの大量の縁を含む粘質土の埋土の中から、瓦質土器の足鍋が3個体出土(第14図:29・30・31)し、土師器椀(第14図:32)や土師器杯(第14図:33)も出土したことから、廃棄土坑としての性格をもつのではないかと考えられる。出土遺物から判断すると、15世紀頃の遺構に比定される。

SK23(第11図 図版9) ⅢC地区中央部やや南西よりに位置し、SI01の北東隣りに位置する。長軸230cm、短軸163cmの楕円形を呈する。深さは最大で53cmである。埋土は2層に分層され、上層がにぶい黄褐色シルト、下層がオリーブ褐色シルトである。上層下部から石、土師器、須恵器が出土したが、すべて破片であるため、明確な時期を特定することができない。

SK27(第11図 図版10) ⅢC地区北東部やや中央部より、SK25の東隣り、SK26南東隣りに位置する。SD07と切り合い関係にあり、上層部が切られている。長軸219cm、短軸157cmの不整形を呈する。深さは最大で36cmである。埋土は、4層に分層され、第1層が黒褐色シルト、第2層が暗灰黄色シルト、第3層がオリーブ褐色シルト、第4層が暗灰黄色シルト(SD07埋土)である。底部から土師器甕(第14図:38・39)が出土した。出土遺物から、古墳時代の遺構と考えられる。



第9図 検出遺構実測図①



第10図 検出遺構実測図②

溝

8条の溝が検出された。内訳はⅢA地区に3条、ⅢB地区に1条、ⅢC地区に3条、ⅢD地区に1条である。ⅢA地区の溝は、規模や深さ、傾きが共通し、ほぼ等間隔に並ぶ溝も検出されたため、暗渠の可能性があるが、その他の地区的溝の機能や、用途は不明である。

S D O 4 (図版8) ⅢB地区北東部に位置する。総延長9.84mの本遺跡最大の溝で、いくつかの柱穴が掘り込まれている。幅は30~80cm、深さは最大で27cmである。埋土からは、瓦質土器の足鍋の脚部（第15図：41）、擂目が残存する片口鉢（第15図：42）が出土した。出土遺物から判断すると、中世後半の遺構に比定される。

S D O 7 (第11図 図版8) ⅢC地区北東部、やや中央よりに位置する。長さ4.5m、幅24.0~36.0cm、深さは最大で32.0cmである。SK26と27の上部を貫くように切っているため、2つの土坑よりも新しい時期の遺構であると考えられる。埋土からは、土師器皿（第15図：43）が出土した。SD08と幅や深さ、傾きがほぼ同じため、この2つは元々同一の溝であったと考えられる。出土遺物から判断すると、中世の遺構に比定される。

柱穴

掘立柱建物跡を構成するものを含む506個の柱穴が検出された。柱穴の分布としては、遺跡の中央部に約半数の柱穴が集中する一方、南西部では密度が低く、浅い柱穴が多い。これは近世から現代にかけて、畑作地や住宅地として利用されていたため、後世の削平や搅乱が行われているためだと考えられる。約半数の柱穴から遺物が出土している。以下、掘立柱建物の構成柱穴以外で主な柱穴について述べる。

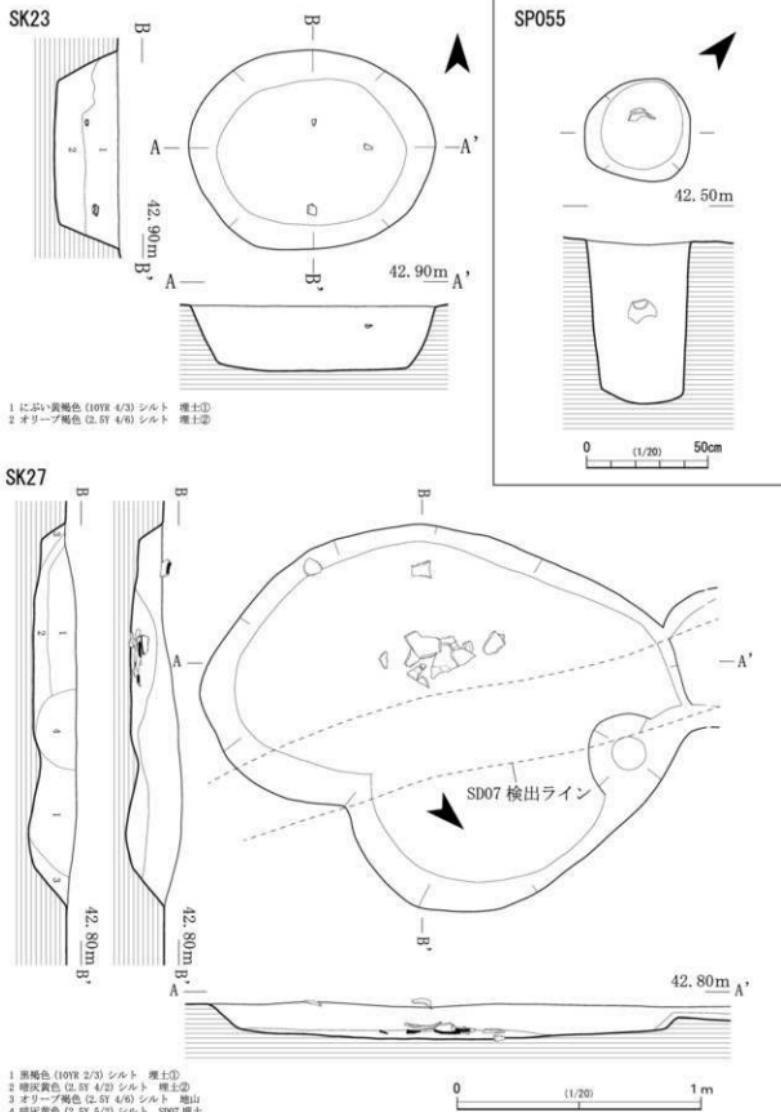
S P O 4 0 (図版11) ⅢD地区中央部南西部より、SK07の北部に位置し、直径30cm、深さは23.5cmである。柱穴直上部から京都系土師器皿（第15図：46・47・48）が3枚連なる形で出土した。出土遺物から判断すると、16世紀初頭~中頃の遺構と比定される。

S P O 5 5 (第11図 図版11) ⅢB地区南西部、SP54の南西隣りに位置し、直径48cm、深さは68cmである。柱穴中層部分から須恵器杯身（第15図：50）が出土した。出土した遺物から判断すると、9世紀初頭~前半頃の遺構に比定される。

S P 1 8 5 (図版11) ⅢC地区中央部、試掘トレンチ南東部に位置する。長軸57cm、短軸40cmの楕円形を呈する。深さは11.5cmである。埋土からは、土師器甕（第15図：58）が出土した。出土した遺物が小片のため、時代の特定は難しい。

S P 1 9 8 (図版11) ⅢC地区中央部北東より、SK24の南西隣りに位置する。長軸44cm、短軸36cmの楕円形を呈する。深さは27cmである。埋土からは、須恵器杯身（第15図：59）が出土した。出土遺物から判断すると、古代の遺構に比定される。

S P 2 3 9 (図版11) ⅢC地区北東部、SP235の北東隣りに位置する。長軸44cm、短軸36cmの楕円形を呈する。深さは42cmである。隣接する柱穴との切り合い関係を見ると、本柱穴の方が年代が古いことが分かる。埋土からは、須恵器杯身（第15図：63）が出土した。出土した遺物から判断すると、古代の遺構に比定される。



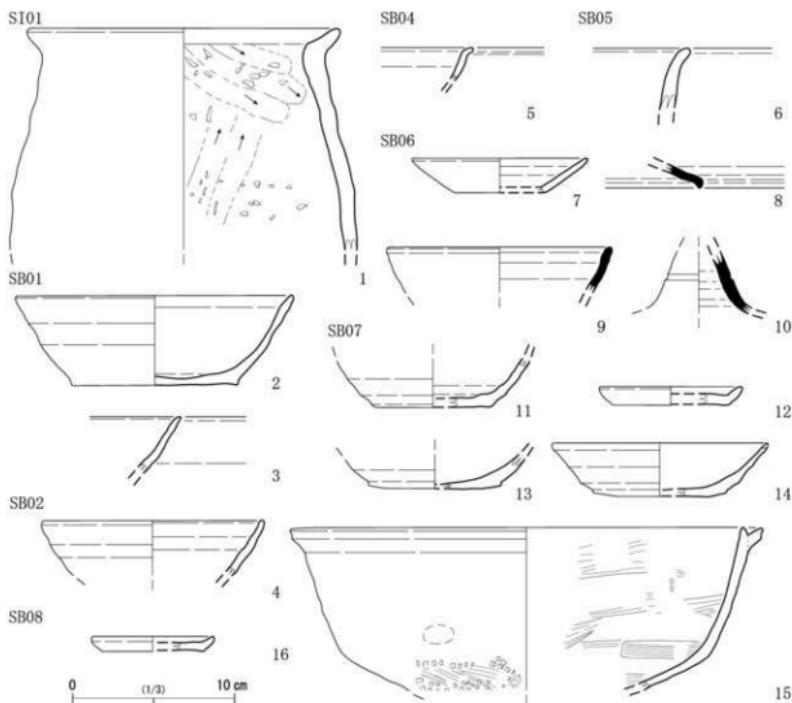
第11図 検出遺構実測図③

3 遺物

調査の結果、縄文土器と、土師器・須恵器・輸入磁器（青磁・白磁）・瓦質土器・古代瓦などを得ることができた。縄文土器は一点のみの出土で、遺構に伴うものではないため、出土遺物の時期は古墳時代後期から中世期が中心であると考えられる。以下、主な遺物について解説を行うが、詳細な法量や調整などについては、章末の出土土器観察表（表2）に掲載した。

竪穴建物跡・掘立柱建物跡出土遺物（第12図、図版12）

1はSI01出土の土師器壺。内面にケズリ・横方向のナデ、外面にもヨコナデを施し、口縁が「く」の字型に屈曲する。古墳時代後期頃に比定される。2～16は掘立柱建物跡出土遺物。2～4は土師器杯で、2・3はSB01出土。2は復元口径17cm、器高5.5cm、復元底径10.1cmを測り、体部は斜め直線方向に立ち上がる。3は外面に煤が付着する。4はSB02出土で、復元口径7.8cmを測り、内外面に回転ナデを施す。5はSB04出土の土師器。小片であるが楕と推定できる。にぶい黄橙色を呈し、口縁が端反りする。6はSB05出土の土師器壺と考えられる。小片のため全体形は不明。7～10はSB06出土遺物。7は土師器杯で、器壁が薄く、体部が外に向かって開く。8～10は須恵器。8は杯蓋で、口縁に緩いくびれが見られる。9は杯身口縁部と考えられる。10は高杯脚部で、外面に一条の沈線がある。

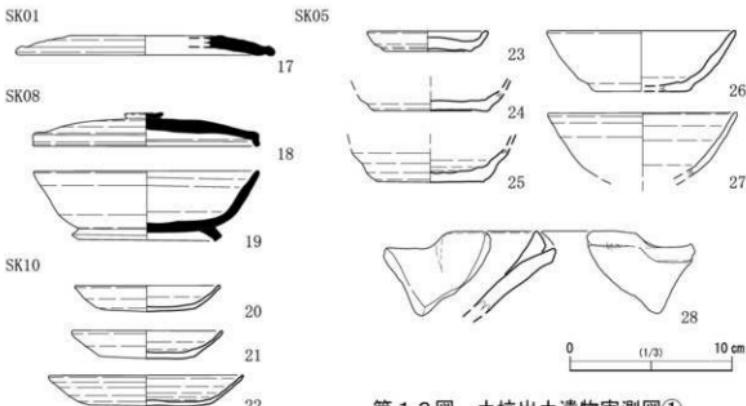


第12図 竪穴建物跡・掘立柱建物跡出土遺物実測図

施される。焼成不良のため灰白色を呈する。11～15はSB07出土遺物。11は土師器杯底部で、復元底径7cmを測り、器面は比較的厚手である。12は土師器皿で、器高が1.1cmと低いタイプのもの。13・14は土師器杯で、ともに復元底径8.2cmを測り、胴部に回転ナデが施されている。胎土・付着した煤の状態など、いくつかの共通点からこの二つは同一個体の可能性がある。15は瓦質鍋。頸部分に貼り付け痕がみられ、外面底部には格子目タタキが施される。14世紀代。16はSB08出土の土師器皿。器高0.9cmと低く、色調も橙色で12とよく似たタイプの皿である。

土坑出土遺物（第13・14図、図版12～14）

17～39は土坑出土遺物。17はSK01出土の須恵器杯蓋。天井が低く、口縁端部は引き伸ばされ、凹線のみ見られる。18・19はSK08出土の共伴資料。18は須恵器杯蓋。口径14cmとやや大型で、平坦な天井にはヘラケズリを施し、扁平なボタン状ツマミをもつ。口縁端部はかえりが消失し、下垂する。19は須恵器杯身で、口径13.8cm、器高4.3cm、底径8.4cmを測り、高台がハの字型に開く。共に完形品であるが、対のものではない。形態的特徴などから8世紀前半～中頃のものと推定される。20～22はSK10出土の土師器皿で、ほぼ全形が窺える資料。20・21は口径9cm前後、器高1.5cm前後、底径5.9cmの中型品、22は口径12cm、器高1.9cm、底径7.5cmのやや大型品。全て2mm程度の薄い器壁をもち、口縁端部は尖り気味に仕上げられている。時期は16世紀前半と考えられる。23～28はSK05出土の土師器。23のみ皿で、24～26は杯。全て橙色を呈し、回転ナデで仕上げる。23・25には回転糸切り痕が見られる。27は薄手のつくりで、にぶい黄橙色の椀か。28は片口鉢の口縁部。胎土が軟質で、器面が摩滅している。29～33はSK15出土品。29～31は瓦質足鍋で、口径が25cm前後の中型品。口縁端部は緩く屈曲し、31のみ蓋受け用の窪みが若干見られる。内面をハケとナデ、外面をハケ、ナデ、格子目タタキなどで仕上げる。外面に煤の付着が見られることから、実際の使用が窺える。15世紀頃の所産。32は土師器挽。断面台形の貼付高台をもつ。33は土師器杯。胎土は精良で、底部の回転糸切り痕が明瞭。34はSK19出土の土師器杯。体部の立ち上がりがかなり緩い。35・36はSK21出土の土師器で、35は皿。板目圧痕が顕著で、やや丸みを帯びた底をもつ。36は杯で、底部と体部の境界にはっきりと

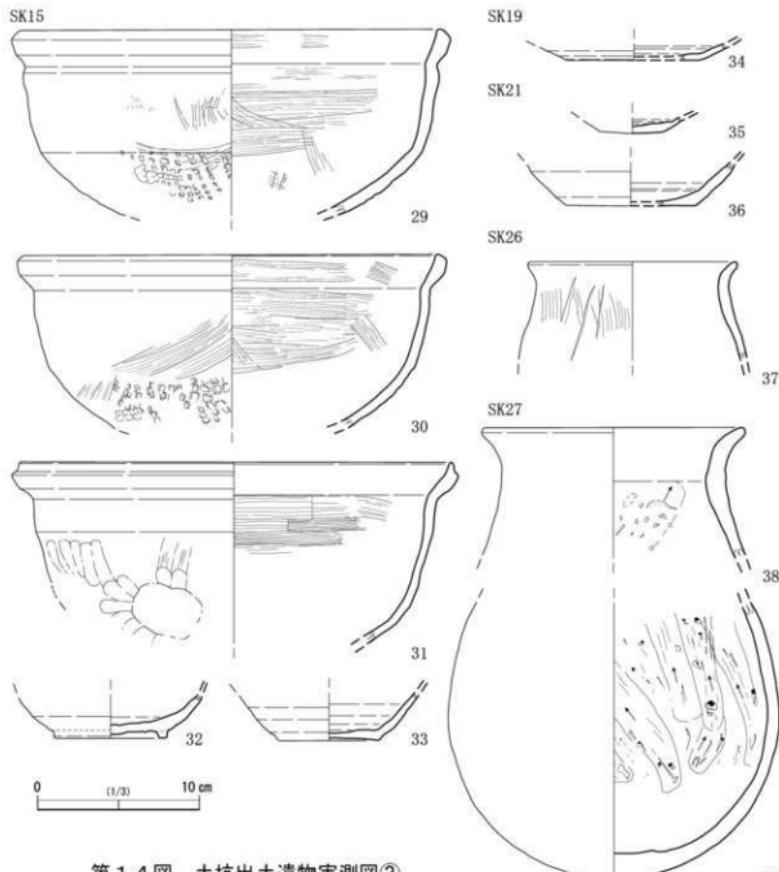


第13図 土坑出土遺物実測図①

した稜をもつ。37～39は土師器甕。37はSK26出土。外面に縦方向のハケナデを施し、黒褐色を呈する。口縁が緩やかに外反する。38・39はSK27出土。38は口縁部で、復元口径16cmを測り、内面に縦方向のケズリ、外面は横ナデを施して、37同様、口縁は緩やかに外反する。39は胴～底部で、内面に縦方向のケズリを施し、底部がわずかに尖る。明瞭な接合痕は見つからないが、形状、色調、調整などから同一個体の可能性も考えられる。5世紀代と推定される。

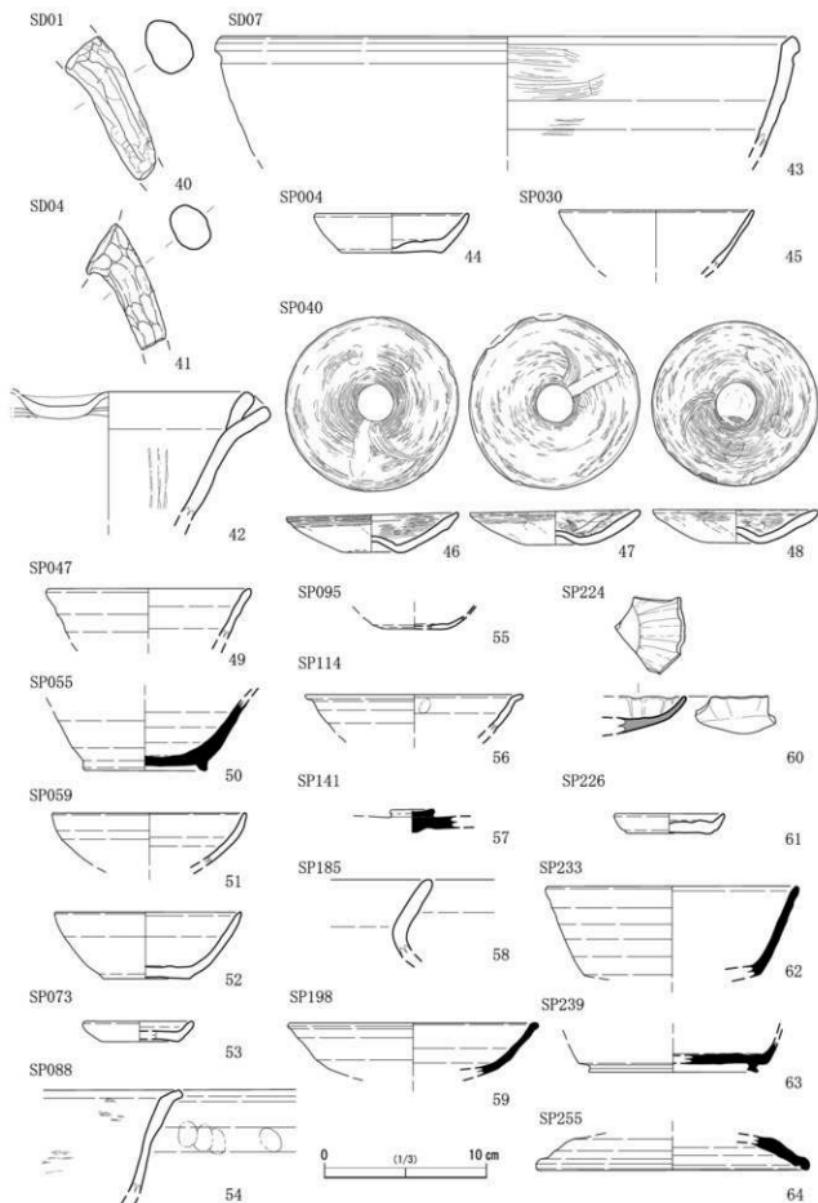
溝・柱穴出土遺物（第15図、図版14・15）

40～43は溝出土遺物。40はSD01出土の土師器足鍋の脚部。わずかにナデ痕などが残る。41・42はSD04出土の瓦質土器で、41は足鍋脚部。42は片口の擂鉢で、単位は不明だが、3条の擂目が残存する。43はSD07出土の土師器鍋で復元口径35cmを測る大型品。口縁部が短く、外側に屈曲する。44～64は柱穴出土遺物。44はSP004出土の土師器皿。45はSP030出土の土師器杯。復元口径11.8cmを測り、橙



第14図 土坑出土遺物実測図②

39



第15図 満・柱穴出土遺物実測図

色を呈する。46~48はSP040出土の京都系土師器皿。器壁は5mm前後、口径10.1~10.5cm、器高2~2.5cmを測る。全て手づくね成形によるもので、内面は工具によるカキアゲで仕上げる。46のみ口縁端部が先細る形で、47・48は丸みを帯びた、厚手の口縁になっている。16世紀初頭~中頃のもの。49はSP047出土の土師器椀小片。50はSP055出土の須恵器杯身で、灰白色の色調は焼成不良によるもの。底部と体部の境に、断面台形の削り出し高台がつく。9世紀初頭~前半頃のもの。51・52はSP059出土の土師器皿。51は体部がやや内湾気味に立ち上がる。52は復元口径11.4cm、器高4.1cm、底径5.3cmを測り、口縁端部が先細るタイプである。53はSP073出土の土師器皿で、ほぼ完全復元可能な資料。回転ナデによる丁寧なつくり。54はSP088出土の土師器鍋で、垂直気味の体部をもち、ハケ、ナデなどで仕上げる。外面には煤が付着する。14世紀後半頃。55はSP095出土の土師器皿。器壁は薄く、外面全体に赤色塗料の痕が見受けられる。15世紀代のものと考えられる。56はSP114出土の土師器椀で、口縁端部が端反りする。57はSP141出土。須恵器杯蓋のボタン状ツマミ部分。58はSP185出土の土師器甕。胎土が粗雑で、明赤褐色を呈する。59はSP198出土の須恵器杯身。体部が大きく開いて立ち上がるタイプ。60はSP224出土の菊型皿。被窯のため胎土が粗雑。青花の可能性もあるが、判然としない。61はSP226出土の土師器皿。口径7cm前後、橙色を呈し回転ナデ仕上げ。これまで解説してきた皿の多くと同じタイプのもの。62・63は須恵器杯身で、62はSP233出土。体部の回転ナデ調整と、わずかに残る底部には、回転ヘラ切りが見受けられる。63はSP239出土で、断面四角形の貼付高台をもつ。64はSP255出土の須恵器杯蓋。口縁端部の下垂も退化した形で残っている。

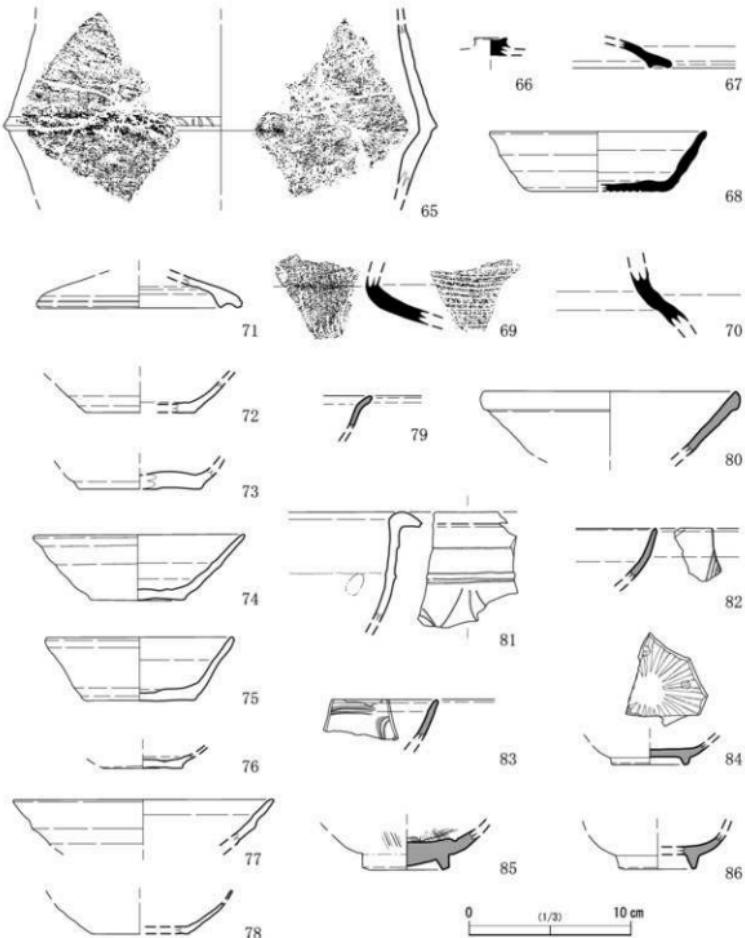
遺構検出出土遺物（第16・17図、図版16・17）

65~103は遺構検出出土遺物。65は縄文土器の深鉢。器面調整は内外面ともケズリ・二枚貝条痕。胴部最大径を測る突起部分に刻み目を施す。縄文晩期のもの。66・67は須恵器杯蓋。66は57と同タイプのもの。67は口縁端部にかえりが見られる。68は須恵器杯身。体部が斜め直線的に立ち上がる。69・70は小片であるが、須恵器甕の一部と考えられる。71は土師質の杯蓋。形態は67と同じタイプ。72~78は土師器皿。72は、底部に板目圧痕がわずかに残る。73は器壁が厚いタイプ。74はほぼ全形の窺える資料。口径13.1cm、器高4cm、底径5.8cmを測り、胎土は精良。回転糸切り痕が明瞭で、体部が外に向かって直線的に立ち上がる。75は74と法量、色調など類似点はあるが、厚手で口縁端部も丸い。76は外に聞く薄手の体部をもつと考えられる。77は復元口径16cmを測り、回転ナデ痕が明瞭に残る。78は回転ナデの後ナデ消しが行われ、両面に赤色塗料の付着が見られる。55と形態的特徴が類似する。79は龍泉窯系青磁碗で、口縁が端反りする。14世紀前半~中頃。80は白磁碗で、口縁は玉縁状を呈する。福建省産。11世紀後半~12世紀前半。81は瓦質の火鉢。外面にヘラミガキ、草花文様と思われるスタンプ文を施す。18~19世紀頃の佐野焼と考えられる。82・83・85は青磁碗。82は外面に櫛描文をもつ。83は内面割花文。85は内外面とも櫛描文を施し、外面露胎。すべて龍泉窯系で、12世紀後半頃のもの。84は白磁皿。内底は菊型文で、2か所トチノ痕が見られる。86は磁器碗。外面のみ灰黄色の釉がかかる。87・88は瓦質羽釜で、頸部に貼付け痕が見られる。89・90は鍋。89は瓦質で、口縁内部がわずかに内湾し、ハケ目が明瞭に残る。90は土師器で、にぶい橙色系の色調である。91は瓦質擂鉢。3条の擂目が残存するが、単位は不明。92~94・96・97は瓦質鍋で、92・93は足鍋。94は外面に格子目タタキを施す。95は土師器甕の一部。98は瓦質擂鉢。6条単位の擂目が残る。99~103

は足鍋脚部で、ナデ成形による指オサエ痕が残る。99は瓦質。100～103は土師器で、101・102は獸脚状の端部をもつ。

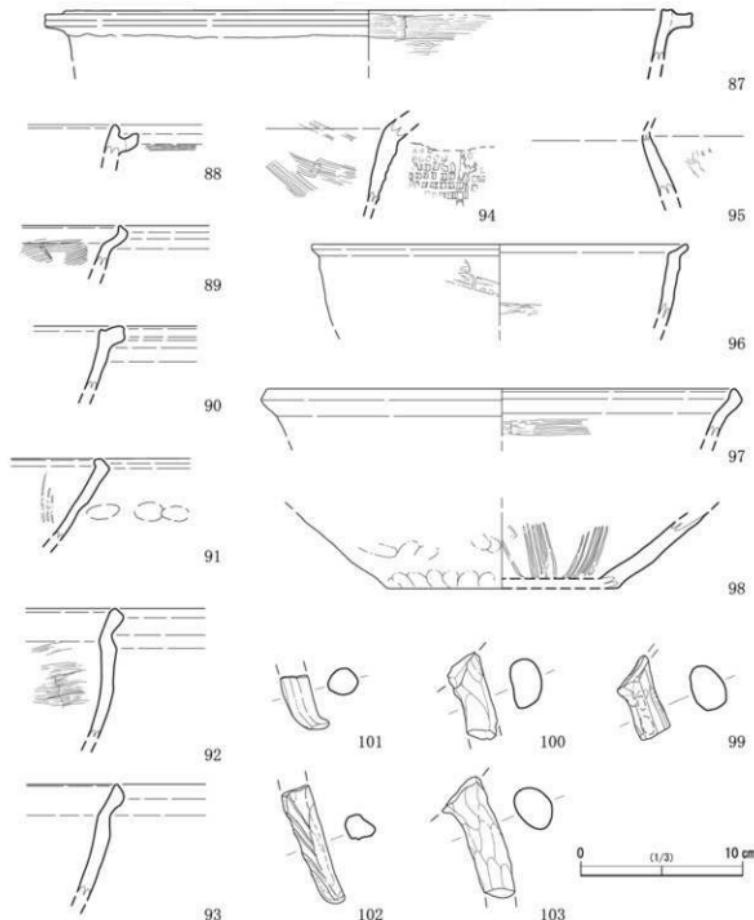
表面採集・表土除去時出土遺物（第18図、図版17・18）

104～116は表面採集・表土除去時出土遺物。104は須恵器高杯で、SI01直上の表土除去時に出土した。回転ナデ後、回転ヘラケズリを施し、青灰色を呈す。形態的特徴からみて6世紀後半頃と推定される。105は古代瓦。凹面に青海波状文、凸面に並行タキを施し、灰白色を呈する。106は土師器杯。橙色を呈し、内外面に回転ナデを施す。底は回転糸切痕が残る。107は土師器椀。ハの字型に聞く低い高

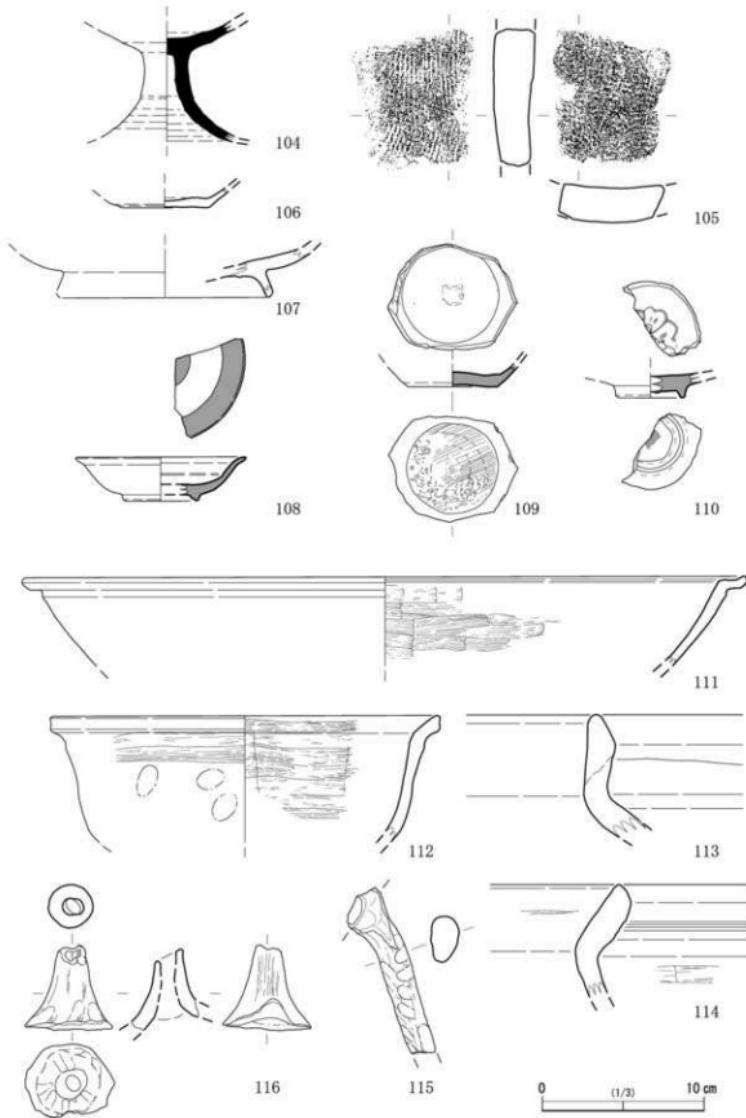


第16図 遺構検出時出土遺物実測図①

台がつく。108は白磁碗。口縁部が緩く外反し、内底に蛇の目釉剥ぎを施す。14世紀代の福建省産。109は白磁皿。内底に調整途中のような凹みが見られる。全面施釉で、特に外底はハケによる丁寧な仕上げ。二次焼成の後も見られる。12世紀代の福建省産。110は青磁碗。内底に草花文様が見られ、外底は蛇の目釉剥ぎ。龍泉窯系。14世紀前半頃。111は上師器鍋で、口径が40cm超の大型品。ハケが丁寧に施される。14世紀後半頃。112は瓦質鍋。両面にナデ・ハケ痕が見受けられるが、器面は粗い。113・114はそれぞれ瓦質大甕・甕の口縁部。113は胎土に継ぎ目が見られる。115は瓦質足鍋脚部。指サエ痕が顕著である。116は瓦質土器の注口。近世の土瓶の一部と推定される。



第17図 遺構検出時出土遺物実測図②



第18図 表面採集・表土除去時出土遺物実測図

BN	地区	遺構	器種	器形	寸法(cm)		胎	土	被成	色		調		整		備考欄
					口径	脚高				内面	外面	内面	外面	内面	外面	
1	Ⅲ	SD01	土師器	甕	-	18.8	13.6cm	-	瓶	多量	やや軟質	褐色	ケズリ後板ナデ	-	横ナデ	古墳時代後期
2	Ⅲ	SB01 (SP006)	土師器	杯	(17.0)	5.5	(10.1)	直	少量	やや軟質	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	横ナデ	古墳時代後期
3	Ⅲ	SB01 (SP013)	土師器	杯	-	3.4cm	-	直	少量	やや軟質	浅黃褐色	浅黃褐色	摩減	摩減	外縁縦付着 くさり縫合む	
4	Ⅲ	SB02 (SP020)	土師器	杯	(7.8)	3.4cm	-	直	少量	硬質	褐色	褐色	回転ナデ	回転ナデ	くさり縫合む	
5	Ⅲ	SB04 (SP133)	土師器	甕	-	2.0cm	-	直	多量	軟質	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	摩滅しい	
6	Ⅲ	SB05 (SP150)	土師器	甕	-	3.6cm	-	直	多量	やや軟質	にぶい 黄褐色	明赤褐色	摩減	摩減	外縁縦付着 くさり縫合む	
7	Ⅲ	SB06 (SP164)	土師器	杯身	(10.8)	2.1	(5.6)	直	少量	軟質	にぶい 黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	摩減	摩減	
8	Ⅲ	SB06 (SP164)	須恵器	杯蓋	-	1.5cm	-	直	-	硬質	灰褐色	灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	ナデ方時計回り	
9	Ⅲ	SB06 (SP167)	須恵器	身舟	(13.6)	2.8cm	-	直	少量	硬質	灰褐色	灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	ナデ方時計回り	
10	Ⅲ	SB06 (SP171)	須恵器	高杯	-	3.8cm	最大 (6.4)	直	多量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ	沈縫ナメ	
11	Ⅲ	SB07 (SP205)	土師器	杯	-	3.2cm	(7.0)	直	少量	硬質	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	
12	Ⅲ	SB07 (SP205)	土師器	皿	(8.6)	11	(7.0)	直	少量	硬質	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	14と同じ体か 摩滅しい。外縁縦付着	
13	Ⅲ	SB07 (SP205)	土師器	杯	-	2.1cm	(8.2)	直	少量	軟質	にぶい 黄褐色	浅黃褐色	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	
14	Ⅲ	SB07 (SP205)	土師器	杯	(13.2)	(32)	(8.2)	直	少量	軟質	にぶい 黄褐色	浅黃褐色	回転ナデ	回転ナデ	摩滅しい。外縁縦付着	
15	Ⅲ	SB07 (SP205)	瓦質土器	鍋	(29.2)	10.9cm	-	直	少量	硬質	灰黄色	にぶい 黄褐色	ハケナデナメ	ハケナデナメ	14世紀代	
16	Ⅲ	SB08 (SP218)	土師器	皿	(7.4)	0.9	(6.2)	直	少量	軟質	橙色	橙色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	回転糸切り	
17	Ⅲ	SK01	須恵器	杯蓋	16.0	2.0cm	-	直	多量	硬質	灰褐色	灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラケズリ	
18	Ⅲ	SK08	須恵器	杯蓋	14.0	2.1	-	直	少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ	8世紀前半～中頃	
19	Ⅲ	SK08	須恵器	杯身	13.8	4.2	8.4	直	少量	硬質	灰褐色	灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	8世紀前半～中頃	
20	Ⅲ	SK10	土師器	皿	8.9	1.6	5.9	直	少量	硬質	浅黄色	浅黄色	回転ナデ後ナデ	回転ナデ・ナデ	16世紀前半頃	
21	Ⅲ	SK10	土師器	皿	9.2	1.7	5.9	直	少量	硬質	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	回転ナデ後ナデ	回転ナデ・ナデ	16世紀前半頃	
22	Ⅲ	SK10	土師器	皿	12.0	1.9	7.5	直	少量	硬質	淡黄色	浅黃褐色	回転ナデ後ナデ	回転ナデ・ナデ	16世紀前半頃	
23	Ⅲ	SK05	土師器	皿	7.4	1.3	5.2	直	多量	硬質	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	くさり縫合む	
24	Ⅲ	SK05	土師器	杯	-	1.2cm	7.0	直	少量	硬質	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	くさり縫合む	
25	Ⅲ	SK05	土師器	杯	-	2.1cm	6.0	直	少量	硬質	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	くさり縫合む	
26	Ⅲ	SK05	土師器	杯	(11.6)	3.7	(5.6)	直	少量	硬質	橙色	橙色	摩減	摩減	くさり縫合む	
27	Ⅲ	SK05	土師器	碗	(11.6)	3.9cm	-	直	少量	軟質	にぶい 橙色	にぶい 橙色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	15世紀後半～16世紀	
28	Ⅲ	SK05	土師器	片口鉢	-	5.0cm	-	直	少量	軟質	灰白色	灰白色	摩減	摩減	15世紀後半～16世紀	
29	Ⅲ	SK15	瓦質土器	足頭	(26.0)	11.3cm	(21.4)	瓶	多量	硬質	暗灰色	暗灰色	ナデ後ハケナメ 斜めハケナメ	ナデ・斜めハケナメ	15世紀後半～16世紀 外縁縦付着	
30	Ⅲ	SK15	瓦質土器	足頭	(25.4)	11.6cm	22.4	瓶	多量	硬質	暗灰色	暗灰色	ナデ・横ハケナメ 斜めハケナメ	ナデ・横ハケナメ 斜めハケナメ	15世紀後半～16世紀 外縁縦付着	
31	Ⅲ	SK15	瓦質土器	足頭	26.4	11.1cm	-	瓶	多量	硬質	灰白色	灰白色	ナデ・ハケナメ	ナデ・ハケナメ	15世紀後半～16世紀 外縁縦付着	
32	Ⅲ	SK15	土師器	碗	-	2.5cm	7.0	直	多量	硬質	浅黃褐色	浅黃褐色	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	貼付高台	
33	Ⅲ	SK15	土師器	杯	-	2.7cm	6.0	直	少量	硬質	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	くさり縫合む	
34	Ⅲ	SK19	土師器	杯	-	1.0cm	(8.0)	直	少量	軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	くさり縫合む	
35	Ⅲ	SK21	土師器	皿	-	0.9cm	4.0	直	少量	軟質	浅黃褐色	浅黃褐色	回転ナデ	回転ナデ	貼付高台	
36	Ⅲ	SK21	土師器	杯	-	2.7cm	(8.0)	直	少量	軟質	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	15世紀後半～16世紀 外縁縦付着	
37	Ⅲ	SK26	土師器	甕	(12.7)	6.0cm	-	瓶	多量	硬質	黑褐色	黑褐色	摩減	摩減	ハケ	
38	Ⅲ	SK27	土師器	甕	(16.0)	7.8cm	-	直	多量	硬質	浅黃褐色	浅黃褐色	ケズリ	横ナデ	39と同一體か	
39	Ⅲ	SK27	土師器	甕	-	17.1cm	(6.6)	瓶	多量	軟質	浅黃褐色	浅黃褐色	ケズリ	摩減	5世紀代か	
40	Ⅲ	SD01	土師器	足頭(脚)	-	8.8cm	幅3.5 ×2.5	直	少量	硬質	灰白色	灰白色	-	ナデ・抱オサエ	ナデわざがに残る	

表2 出土土器観察表①

BN	地区	造様	器種	器形	寸法(cm)		胎	土	焼成	色		調		要	備考欄	
					内面	外面				内面	外面	内面	外面			
41	III	SD04	瓦質土器 足継(脚)	口徑 77mm 幅28 ×22	-	-	胎 硬質	土 浅黄色	焼成	内面 ナデ	外面 ナデ	内面 ナデ	外面 ナデ	ナデ	ナデ	
42	III	SD04	瓦質土器 接跡	口徑 78mm	-	-	胎 多量	土 やや軟質	焼成	内面 黒褐色	外面 片口部分ナデ 残存3条の凹凸	内面 ナデ	外面 ナデ	ナデ	ナデ	
43	III	SD07	土師器 瓶	口徑 (35.0) 74mm	-	-	胎 多量	土 やや軟質	焼成	内面 にぶい 橙色	外面 黒褐色	内面 ナデ・ハケ	外面 ナデ	ナデ	ナデ	
44	III	SP004	土師器 瓶	口徑 (96) 16	(6.2)	直 少量	胎 硬質	土 にふい 橙色	焼成	内面 にぶい 橙色	外面 黒褐色	内面 回転ナデ	外面 回転ナデ	ナデ	ナデ	
45	III	SP030	土師器 杯	口徑 (118) 35mm	-	-	胎 少量	土 やや軟質	焼成	内面 にぶい 橙色	外面 黒褐色	内面 回転ナデ	外面 回転ナデ	ナデ	ナデ	
46	III	SP040	土師器 瓶	口徑 10.5 2.5	39	直 少量	胎 硬質	土 にぶい 黄褐色	焼成	内面 にぶい 黄褐色	外面 手づくね成形	内面 京都系土師器 16世紀初期～中頃	外面 京都系土師器 16世紀初期～中頃	ナデ	ナデ	
47	III	SP040	土師器 瓶	口徑 10.4 2.1	34	直 多量	胎 硬質	土 にぶい 黄褐色	焼成	内面 にぶい 黄褐色	外面 手づくね成形	内面 京都系土師器 16世紀初期～中頃	外面 京都系土師器 16世紀初期～中頃	ナデ	ナデ	
48	III	SP040	土師器 瓶	口徑 10.1 2.6	39	直 少量	胎 硬質	土 にぶい 黄褐色	焼成	内面 にぶい 黄褐色	外面 手づくね成形	内面 京都系土師器 16世紀初期～中頃	外面 京都系土師器 16世紀初期～中頃	ナデ	ナデ	
49	III	SP047	土師器 碗	口徑 (124) 29mm	-	-	胎 少量	土 やや軟質	焼成	内面 にぶい 橙色	外面 回転ナデ	内面 回転ナデ	外面 回転ナデ	ナデ	ナデ	
50	III	SP055	須志器 杯身	-	43mm	74	直 多量	胎 硬質	土 灰白色	焼成	内面 にぶい 黄褐色	外面 回転ナデ	内面 回転ナデ	外面 回転ナデ	ナデ	ナデ
51	III	SP059	土師器 杯	口徑 (118) 32mm	-	-	胎 多量	土 やや軟質	焼成	内面 にぶい 黄褐色	外面 手づくねナデ	内面 京都ナ・縦ヘタケナ 船出青白・ハタカラ	外面 9世紀初期～前半頃	ナデ	ナデ	
52	III	SP059	土師器 杯	口徑 (114) 41	53	直 多量	胎 多量	土 やや軟質	焼成	内面 にぶい 黄褐色	外面 回転ナデ	内面 京都ナ・縦ヘタケナ 船出青白・ハタカラ	外面 回転ナデ	ナデ	ナデ	
53	III	SP073	土師器 瓶	口徑 6.8 12	47	直 少量	胎 少量	土 やや軟質	焼成	内面 にぶい 橙色	外面 回転ナデ	内面 京都ナ・縦ヘタケナ 船出青白・ハタカラ	外面 回転ナデ	ナデ	ナデ	
54	III	SP088	土師器 瓶	-	63mm	-	直 多量	胎 少量	土 やや軟質	焼成	内面 にぶい 黄褐色	外面 回転ナデ	内面 京都ナ・縦ヘタケナ 船出青白・ハタカラ	外面 回転ナデ	ナデ	ナデ
55	III	SP095	土師器 瓶	口徑 8.0 8mm	(41)	直 直	胎 多量	土 やや軟質	焼成	内面 にぶい 黄褐色	外面 回転ナデ	内面 京都ナ・縦ヘタケナ 船出青白・ハタカラ	外面 回転ナデ	ナデ	ナデ	
56	III	SP114	土師器 碗	口徑 (13.0) 23mm	-	-	直 多量	胎 多量	土 やや軟質	焼成	内面 にぶい 黄褐色	外面 回転ナデ	内面 京都ナ・縦ヘタケナ 船出青白・ハタカラ	外面 回転ナデ	ナデ	ナデ
57	III	SP141	須志器 杯蓋	口徑 2.7	14mm	-	直 少量	胎 硬質	土 灰白色	焼成	内面 にぶい 黄褐色	外面 回転ナデ	内面 京都ナ・縦ヘタケナ 船出青白・ハタカラ	外面 回転ナデ	ナデ	ナデ
58	III	SP185	土師器 瓶	-	47mm	-	直 多量	胎 少量	土 灰白色	焼成	内面 明赤褐色	外面 回転ナデ	内面 京都ナ・縦ヘタケナ 船出青白・ハタカラ	外面 回転ナデ	ナデ	ナデ
59	III	SP198	須志器 杯身	口徑 (15.2) 32mm	-	-	直 直	胎 少量	土 硬質	土 灰白色	内面 灰白色	外面 回転ナデ	内面 京都ナ・縦ヘタケナ 船出青白・ハタカラ	外面 回転ナデ	ナデ	ナデ
60	III	SP224	須器 瓶	口徑 - 2.3mm	-	-	直 直	胎 少量	土 硬質	土 灰白色	内面 灰白色	外面 回転ナデ	内面 京都ナ・縦ヘタケナ 船出青白・ハタカラ	外面 回転ナデ	ナデ	ナデ
61	III	SP226	土師器 瓶	口徑 (6.8) 12	(5.2)	直 直	胎 少量	土 硬質	土 灰白色	内面 灰白色	外面 回転ナデ	内面 京都ナ・縦ヘタケナ 船出青白・ハタカラ	外面 回転ナデ	ナデ	ナデ	
62	III	SP233	須志器 杯身	口徑 (15.6) 5.6mm	108	直 直	胎 少量	土 硬質	土 灰白色	内面 灰白色	外面 回転ナデ	内面 京都ナ・縦ヘタケナ 船出青白・ハタカラ	外面 回転ナデ	ナデ	ナデ	
63	III	SP239	須志器 杯身	-	21mm	(164)	直 直	胎 少量	土 硬質	土 灰白色	内面 灰白色	外面 回転ナデ	内面 京都ナ・縦ヘタケナ 船出青白・ハタカラ	外面 回転ナデ	ナデ	ナデ
64	III	SP255	須志器 杯蓋	口徑 (16.6) 21mm	-	-	直 直	胎 少量	土 硬質	土 灰白色	内面 灰白色	外面 回転ナデ	内面 京都ナ・縦ヘタケナ 船出青白・ハタカラ	外面 回転ナデ	ナデ	ナデ
65	III	道標検出	萬文土器 深鉢	-	99mm	-	直 多量	胎 多量	土 やや軟質	焼成	内面 灰褐色 にぶい 褐色	外面 回転ナデ	内面 ケズリ 二枚貝皿	外面 縦文晚期	ナデ	ナデ
66	III	道標検出	須志器 杯蓋	口徑 2.0	16	-	直 直	胎 少量	土 硬質	土 灰白色	内面 灰褐色 にぶい 褐色	外面 回転ナデ	内面 ケズリ 二枚貝皿	外面 縦文晚期	ナデ	ナデ
67	III	道標検出	須志器 杯蓋	-	17mm	-	直 直	胎 少量	土 硬質	土 灰白色	内面 灰褐色 にぶい 褐色	外面 回転ナデ	内面 ケズリ 二枚貝皿	外面 縦文晚期	ナデ	ナデ
68	III	道標検出	須志器 杯身	-	13.2	37	直 直	胎 少量	土 硬質	土 灰白色	内面 灰褐色 にぶい 褐色	外面 回転ナデ	内面 ケズリ 二枚貝皿	外面 縦文晚期	ナデ	ナデ
69	III	道標検出	須志器 變か	-	2.4mm	-	直 直	胎 多量	土 硬質	土 灰白色	内面 灰褐色 にぶい 褐色	外面 回転ナデ	内面 ナデ・回転ナデ ケズリ・青海波状文 キ・回転ナデ	外面 ナデ・回転ナデ ケズリ・青海波状文 キ・回転ナデ	ナデ	ナデ
70	III	道標検出	須志器 變か	-	36mm	-	直 直	胎 少量	土 やや軟質	土 灰白色	内面 灰褐色 にぶい 褐色	外面 回転ナデ	内面 ナデ・回転ナデ ケズリ・青海波状文 キ・回転ナデ	外面 ナデ・回転ナデ ケズリ・青海波状文 キ・回転ナデ	ナデ	ナデ
71	III	道標検出	土師質 土器	杯蓋 (12.4)	20mm	-	直 直	胎 少量	土 硬質	土 灰褐色 にぶい 褐色	内面 灰褐色 にぶい 褐色	外面 回転ナデ	内面 ナデ・回転ナデ ケズリ・青海波状文 キ・回転ナデ	外面 ナデ・回転ナデ ケズリ・青海波状文 キ・回転ナデ	ナデ	ナデ
72	III	道標検出	土師器 杯	-	1.8mm	(3.4)	直 直	胎 少量	土 やや軟質	土 灰褐色 にぶい 褐色	内面 灰褐色 にぶい 褐色	外面 回転ナデ	内面 ナデ・回転ナデ ケズリ・青海波状文 キ・回転ナデ	外面 ナデ・回転ナデ ケズリ・青海波状文 キ・回転ナデ	ナデ	ナデ
73	III	道標検出	土師器 杯身	-	1.3	(7.4)	直 直	胎 少量	土 硬質	土 灰褐色 にぶい 褐色	内面 灰褐色 にぶい 褐色	外面 回転ナデ	内面 ナデ・回転ナデ ケズリ・青海波状文 キ・回転ナデ	外面 ナデ・回転ナデ ケズリ・青海波状文 キ・回転ナデ	ナデ	ナデ
74	III	道標検出	土師器 杯	-	13.1	4.0	直 直	胎 少量	土 硬質	土 灰褐色 にぶい 褐色	内面 灰褐色 にぶい 褐色	外面 回転ナデ	内面 ナデ・回転ナデ ケズリ・青海波状文 キ・回転ナデ	外面 ナデ・回転ナデ ケズリ・青海波状文 キ・回転ナデ	ナデ	ナデ
75	III	道標検出	土師器 杯	-	11.2	3.9	直 直	胎 少量	土 软質	土 灰褐色 にぶい 褐色	内面 灰褐色 にぶい 褐色	外面 回転ナデ	内面 ナデ・回転ナデ ケズリ・青海波状文 キ・回転ナデ	外面 ナデ・回転ナデ ケズリ・青海波状文 キ・回転ナデ	ナデ	ナデ
76	III	道標検出	土師器 杯	-	0.9mm	4.8	直 直	胎 少量	土 やや軟質	土 灰褐色 にぶい 褐色	内面 灰褐色 にぶい 褐色	外面 回転ナデ	内面 ナデ・回転ナデ ケズリ・青海波状文 キ・回転ナデ	外面 ナデ・回転ナデ ケズリ・青海波状文 キ・回転ナデ	ナデ	ナデ
77	III	道標検出	土師器 杯	-	16.0	2.8mm	直 直	胎 少量	土 やや軟質	土 灰褐色 にぶい 褐色	内面 灰褐色 にぶい 褐色	外面 回転ナデ	内面 ナデ・回転ナデ ケズリ・青海波状文 キ・回転ナデ	外面 ナデ・回転ナデ ケズリ・青海波状文 キ・回転ナデ	ナデ	ナデ
78	III	道標検出	土師器 杯	-	1.9mm	(6.0)	直 直	胎 少量	土 硬質	土 灰褐色 にぶい 褐色	内面 灰褐色 にぶい 褐色	外面 回転ナデ	内面 ナデ・回転ナデ ケズリ・青海波状文 キ・回転ナデ	外面 ナデ・回転ナデ ケズリ・青海波状文 キ・回転ナデ	ナデ	ナデ
79	III	道標検出	青磁 碗	-	2.6mm	-	-	-	土 硬質	土 灰褐色 にぶい 褐色	内面 ナデ・回転ナデ ケズリ・青海波状文 キ・回転ナデ	外面 ナデ・回転ナデ ケズリ・青海波状文 キ・回転ナデ	ナデ	ナデ		
80	III	道標検出	白磁 碗	-	16.0	2.9mm	-	-	土 硬質	土 灰褐色 にぶい 褐色	内面 ナデ・回転ナデ ケズリ・青海波状文 キ・回転ナデ	外面 ナデ・回転ナデ ケズリ・青海波状文 キ・回転ナデ	ナデ	ナデ		

表2 出出土器観察表②

BN	地区	遺構	器種	形狀	底量(cm)		勘定	土	焼成	色		質		備考欄		
					口径	底高				鉢	外面	内面	外面			
81	II	遺構検出	瓦質土器	火鉢	-	6.7残	-	密	少量	硬質	灰色	灰色	ナデ・粘オサエ	ハラミガニ 佐野地 18世紀末~19世紀頭		
82	II	遺構検出	青磁	碗	-	3.2残	-	-	-	硬質	筋土・ 灰白色	鉢	灰色	施釉	施釉・擦拭文	
83	II	遺構検出	青磁	碗	-	2.5残	-	-	-	硬質	筋土・ 灰白色	ナ・オリーブ色	回転ナデ・施釉	施釉・擦拭文		
84	II	遺構検出	白磁	皿	-	1.4残	(4.8)	-	-	硬質	筋土・ 灰白色	鉢	灰色	施釉	施釉・擦拭文	
85	II	遺構検出	青磁	碗	-	2.5残	5.3	-	-	硬質	筋土・ 灰白色	ナ・オリーブ色	回転ナデ・施釉	施釉・擦拭文		
86	II	遺構検出	紺器	碗	-	2.2残	(4.8)	-	-	硬質	筋土・ 灰白色	鉢	灰色	施釉	施釉・擦拭文	
87	II	遺構検出	瓦質土器	羽刷(31.4)	2.7残	-	密	少量	硬質	灰黄色・ 黑色	灰黄色・ 黑色	ナ・ハケ	ナ・粘付韌			
88	II	遺構検出	瓦質土器	羽刷	-	1.9残	-	密	少量	やや軟質	灰色	にぶい 黄褐色	ナ・ナメハケ	回転ナデ・ ナデ・粘付韌		
89	II	遺構検出	瓦質土器	鍋	-	2.4残	-	密	少量	硬質	灰黄色	黄褐色	回転ナデ・ ナメハケ	回転ナデ		
90	II	遺構検出	土器部	鍋	-	4.0残	-	密	多量	やや軟質	浅黃褐色	にぶい 橙色	回転ナデ	回転ナデ		
91	II	遺構検出	瓦質土器	瓶鉢	-	5.0残	-	粗	多量	硬質	灰黃褐色	灰白色	残存3条の捺目	ナオサエ		
92	II	遺構検出	瓦質土器	足鍋	-	8.0残	-	粗	多量	硬質	青灰色	青灰色	ナデ・ハケ	ナデ		
93	II	遺構検出	瓦質土器	足鍋	-	7.1残	-	粗	多量	硬質	灰白色	灰色	摩滅		外由環付着	
94	II	遺構検出	瓦質土器	鍋	-	5.2残	-	密	多量	やや軟質	灰色	灰色	ナデ・ハケ	ナデ・精子目ナ タキ		
95	II	遺構検出	土器部	甕か	-	3.9残	-	粗	多量	やや軟質	黄褐色	にぶい 黄褐色	摩滅	ナデ・ハケ		
96	II	遺構検出	瓦質土器	鍋(23.0)	5.0残	-	密	多量	軟質	灰白色	黄褐色	ナ・ハケ	ナ・ハケ			
97	II	遺構検出	瓦質土器	鍋(28.8)	1.9残	-	密	少量	やや軟質	浅黃褐色	黄褐色	回転ナデ・ ナメハケ	回転ナデ・ナデ			
98	II	遺構検出	瓦質土器	箆鉢	-	4.6残	(14.2)	粗	多量	硬質	灰白色	灰色	ナ・ハケ	ナ・ナメハケ		
99	II	遺構検出	瓦質土器	足鍋(脚)	-	5.2残	概2.9	密	少量	やや軟質	一	灰白色	一	ナオサエ	塗付着	
100	II	遺構検出	土器部	足鍋(脚)	-	5.2残	概2.8 ×1.8	粗	多量	やや軟質	にぶい 橙色	灰白色	一	ナ・成形		
101	II	遺構検出	土器部	足鍋(脚)	-	2.4残	概1.8	密	少量	硬質	一	橙色	摩滅			
102	II	遺構検出	土器部	足鍋(脚)	-	6.8残	概1.8 ×1.5	粗	少量	硬質	一	灰白色	一	ナオサエ		
103	II	遺構検出	土器部	足鍋(脚)	-	7.2残	概2.7 ×2.1	粗	多量	硬質	にぶい 橙色	にぶい 黄褐色	一	ナ・成形		
104	II	表土除去	風窓	窓	-	7.3残	-	密	-	硬質	青灰色	青灰色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	6供給後半塗	
105	II	表土除去	瓦	-	長径 8.4残	短径 6.5残	最厚 2.4	密	多量	硬質	灰白色	灰白色	凸面 青面	並行カタキ	古代	
106	II	表面探査	主器部	杯	-	1.2残	5.4	密	少量	やや軟質	褐色	褐色	回転ナデ	回転ナデ・回転 糸切り後ナデ		
107	II	表土除去	土器部	碗	-	2.9残	(12.6)	密	少量	やや軟質	にぶい 黄褐色	丁寧なナデ	丁寧なナデ			
108	II	表土除去	白磁	碗	(10.4)	27	(4.8)	-	-	硬質	筋土・ 灰白色	鉢	灰色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・回転 糸切り後ナデ	
109	II	表面探査	白磁	皿	-	1.3残	5.6	-	-	硬質	筋土・ 灰白色	ナ・オリーブ 色	回転ナデ・施釉	回転ナデ・施釉		
110	II	表面探査	青磁	碗	-	1.5残	(4.0)	-	-	硬質	筋土・ 灰白色	ナ・オリーブ 色	施釉・草花文	施釉・草花文	摩滅者系 高台山露胎・移工前	
111	II	表土除去	土器部	碗	(40.8)	5.1残	-	密	多量	硬質	淡黄色	にぶい 黄褐色	ハケ	ナデ	14供給後半塗	
112	II	表面探査	瓦質土器	鍋	(23.6)	7.7残	-	粗	多量	硬質	黑色	黑色	ナ・ハケ	ナ・ハケ	ナ・ナメハケ	
113	II	表面探査	瓦質土器	大甕	-	7.5残	-	粗	多量	硬質	灰黄色	黑色	摩滅	ナデ		
114	II	表面探査	瓦質土器	甕	-	6.9残	-	粗	多量	硬質	灰白色	青灰色	ハケ	ナ・ハケ	沈縫之集	
115	II	表土除去	瓦質土器	足鍋(脚)	-	10.7残	概2.5 ×1.8	粗	多量	やや軟質	にぶい 褐色	灰黄色	ナ・ナメハケ	ナ・ナメハケ		
116	II	表面探査	瓦質土器	浴口小	-	5.0残	-	密	少量	硬質	暗灰色	ナ・ナメハケ	ナ・ナメハケ	近井		

表2 出土土器観察表③

IV まとめ

今年度の発掘調査に先立ち、平成23年度Ⅰ・Ⅱ地区の調査時に、Ⅲ地区の水田耕作に伴う擁護壁設置工事が行われ、調査対象区の両側約2mの部分は既に調査済みである。今回は平成23年度の調査結果も含めて考察することとする。

今年度の発掘調査区で遺構の密度が高いのは、北東部側、農業用水路東側Ⅲ-C地区の部分であるが、調査区のほぼ中央の南北方向に用水路が設置されており、削平が進んでいるため、平成23年度の調査区であるⅠ地区の遺構密集区と比べると、全体的に遺構密度が低い。遺構の主なものは柱穴であり、掘立柱建物跡を構成するものと考えられるが、宅地の造園に伴う擾乱も進んでおり、構成柱穴として確定できる遺構は少なかった。堅穴建物跡1棟、掘立柱建物跡9棟、土坑30基のほか、柱穴506個などが検出されたが、その大部分は中世期の遺構と考えられ、古墳時代や古代の条里制に伴うものと考えられる遺構も検出された。遺物は、縄文土器と、土師器・須恵器・輸入磁器（青磁・白磁）・瓦質土器・古代瓦などを得ることができた。縄文土器は一点のみの出土で、遺構に伴うものではないため、出土遺物の時期は古墳時代後期から中世期が中心である。

まず遺構について述べることとする。前回の調査と同様に遺構からの出土遺物が少なく、遺構の年代特定が困難であるが、出土遺物及び柱穴の配列などから9棟の掘立柱建物跡を復元することができた。9棟のうち棟方向がほぼ南北の建物が1棟（SB06）、東西のものが1棟（SB03）あり、検出された遺物からも、これらは古代の掘立柱建物跡と考えられる。このうちSB06は規模も大きく、検出された遺物は少量であるが、柱痕跡もはっきりと残っており、特に西側の柱穴の形状・柱痕跡の配置等から、当時の有力者の住居であったことをうかがわせる。

残りの7棟は中世の掘立柱建物跡に比定され、桁行の棟方向が東に20~35°傾く建物が3棟、西に60~70°傾く建物が4棟あり、いずれも、現在の水田や宅地の地割方向とほぼ一致することから、現在の宮野下地区集落の原型がこの時期に形成されと考えられる。建物の規模は20m前後で比較的小さなものが多いが、SB01及びSB05は50m以上で規模が大きい。SB01は、桁行3間、梁行3間の建物で、構成柱穴であるSP006・013からは中世に比定される土師器杯が検出されている。またSB01の北東約20mの地点からは、後述する京都系の土師器皿も出土していることから、大内氏に関連した有力者の建物遺構の可能性も考えられる。SB05は農業用水路の設置により北西部の削平が進み全容は不明であるが、残存する柱穴の大きさと配列から、四面庇建物であったと推測され、柱穴から検出された遺物から中世の建物に比定される。身舎は桁行2間、梁行2間と推測されるが、北西部が用水路により削平が進んでいることと、調査範囲が道路設置部分に限定されているため全容がはっきりしない。いずれにしても規模や構造などから、一般的な掘立柱建物跡とは異なる建物である。

また、調査区のほぼ中央からは、古墳時代後期に比定される堅穴建物跡が検出された。Ⅰ地区の調査時にも、堅穴建物跡が検出されているが、こちらは弥生時代の所属であり、今回検出された堅穴建物跡とは時代が異なる。平成14年、山口市教育委員会文化財保護課による中恋路遺跡第2次調査（山口市埋蔵文化財年報3~平成14（2002）年度~2004 山口市教育委員会）において、同タイプの堅穴建物跡が2棟、また同時代に比定される堅穴建物跡が多数検出されており、調査対象地区も接していることから、古墳時代の関連した集落遺跡である可能性が高い。また、来年度の調査に先立ち水田

耕作部分の擁護壁設置工事に伴うIV地区の調査でも、古墳時代に比定される竪穴建物跡が検出されており、古墳時代には椹野川左岸地区の広範囲にわたる集落が存在していた可能性がある。

次に遺物についてである。今回の調査区では、前述のとおり柱穴からの出土遺物が少なく、比較的大きな廐棄土坑と思われる遺構からもほとんど遺物が出土しなかったが、平成23年度の擁護壁設置工事に伴う発掘調査時に京都系土師器皿の完形品が3点出土した。これらは、15世紀末～16世紀初頭、大内氏の全盛期に生産・消費されていたものである。京都系土師器皿は、在地で從来つくられている土師器皿とは違い、ロクロを使わない、手づくね成形による厚手の皿である。その形態や製作方法から、京都もしくはその付近から山口へ製品が持ち込まれたか、技法が伝わって在地の職人が真似て作ったものと考えられている。

大内氏は代々、京都とのつながりの強い一族で、そのため大内氏館跡や別邸である築山館跡からは、多量の京都系土師器皿が出土し、これらは主に日用品として使用されていた。なかには金箔で覆われた、大変高価なものも存在する。また、一族と縁の深い興隆寺跡や乗福寺跡などの寺院跡や、瑠璃光寺跡遺跡のような墳墓跡からも出土していることから、埋葬・祭祀などに伴うお供え物としても使われていたと考えられる。その他、大内氏館跡や遺跡など周辺の集落跡からも京都系土師器皿は出土しており、中恋路遺跡の例も含めて、周辺に住む一般の人々にも、わずかながら浸透していたことが推測される。また、近接する土坑からは、複数の瓦質の足鍋やロクロ形成された完形の土師器杯も検出されており、平成23年度の調査結果とも関連して、中世大内氏の時代には、かなり大規模な集落が形成されていたと推測できる。

SB03北東部に隣接する土坑（SK08）からは須恵器杯蓋と杯身が出土したが、径の違いなどからセットとなるものではない。杯蓋の形状から8世紀に比定され、SB03と同じく、古代の条里制施行に関連する遺構であると思われる。調査対象地域である椹野川左岸の中恋路地区には、条里型地割がまとまって残存していることが確認されているが、条里制施行に関連する建物は確認されていなかった。今回、その可能性が指摘できる建物を2棟（SB03・06）復元できたことで、宮野盆地椹野川左岸地域の集落立地の歴史を知るうえで貴重な資料を得ることができた。

現在IV地区の発掘調査の準備も進められており、本年度すでに水田耕作部分への擁護壁設置に伴う発掘が行われており、古墳時代の竪穴建物跡や、中世の祭祀に関わる廐棄土坑や土坑墓など多数の遺構が検出された。事前の試掘調査からも、高い密度で遺構が確認されていることから、さらに貴重な資料を得ることができると期待される。

参考文献・引用

- 山口県埋蔵文化財センター調査報告第80集『中恋路遺跡』2012山口県埋蔵文化財センター
- 山口県埋蔵文化財センター調査報告第79集『西土生遺跡』2012山口県埋蔵文化財センター
- 山口市埋蔵文化財年報3－平成14（2002）年度－2004 山口市教育委員会
- 山口市埋蔵文化財調査報告第101集『大内氏館跡』2010年 山口市教育委員会
- 山口市埋蔵文化財調査報告第102集『大内氏館跡12』2011年 山口市教育委員会
- 山口市埋蔵文化財調査報告第103集『大内氏館跡13』2012年 山口市教育委員会
- 佐賀県文化財調査報告書第113集『吉野ヶ里（本編）』1992年3月 佐賀県教育委員会
- 山口市史編集委員会『山口市史』山口市 1982年
- 田村哲夫編『宮野八百年史』宮野八百年史刊行会 1981年

図 版



調査区遠景

図版 2



調査区近景



III地区全景（合成写真 一部修正あり）



III地区（A地区・B地区）全景

図版 4



III A 地区完掘状況（南西から）



III B 地区完掘状況（北東から）



III C 地区完掘状況（北東から）



III D 地区完掘状況（北東から）



III地区北東壁（A—B）土層断面（北西から）



III地区南東壁（C—D）土層断面（南西から）



III地区北西壁（E—F）土層断面（北東から）



III地区南西壁（G—H）土層断面（南東から）



SI01 完掘状況（北東から）



SI01 挖込状況（北東から）



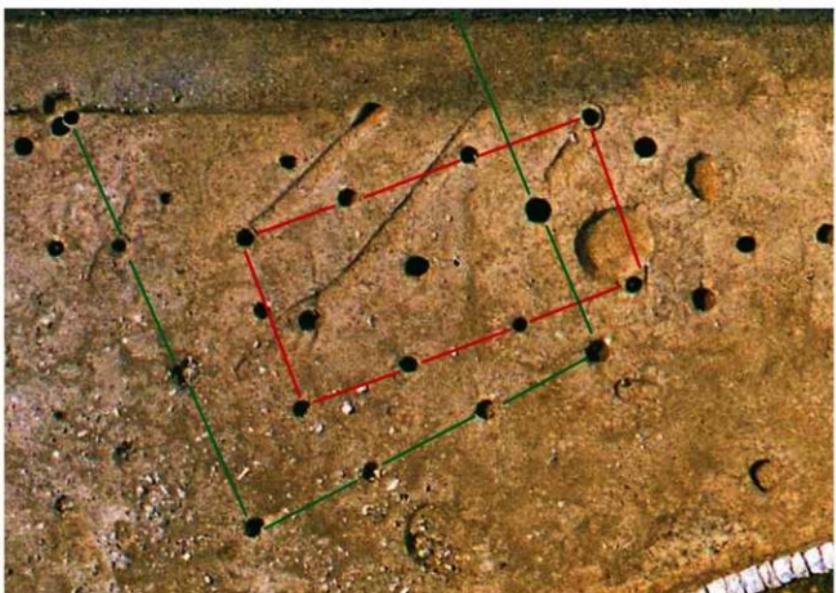
SI01 挖込状況（北西から）



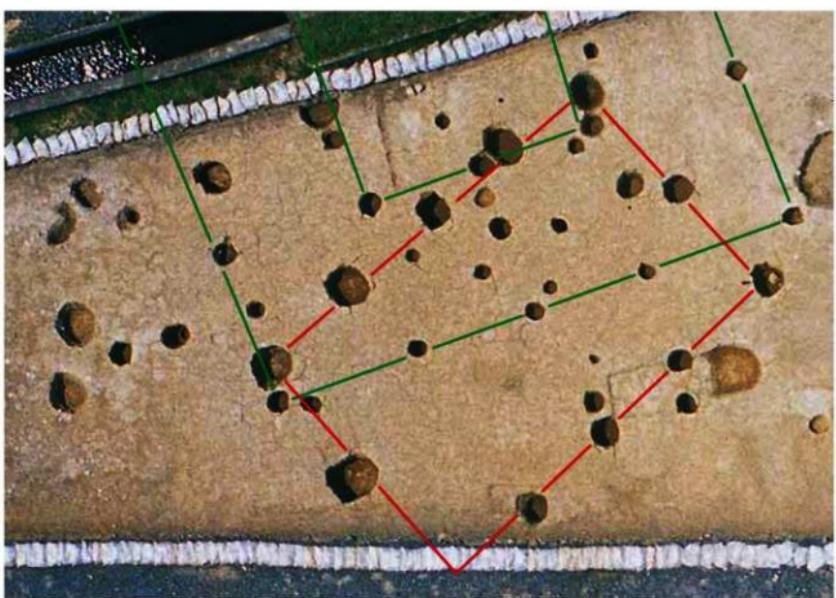
SI01 遺物（土器 C・D・E）出土状況（北西から）



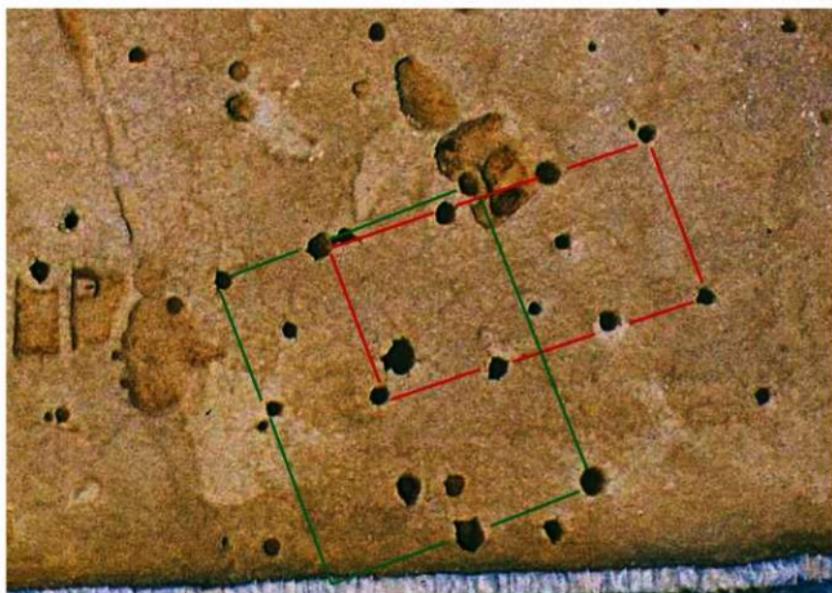
SI01 遺物（土器 A）出土状況（北から）



III A 地区掘立柱建物跡群 (SB01・SB02) (南東から)



III C 地区中央部掘立柱建物跡群 (SB05・SB06) (南東から)



III C 地区北東部掘立柱建物跡群 (SB07・SB08) (南東から)



SB06 (SP165) 石出土状況 (西から)



SB06 (SP166) 石出土状況 (西から)



SB07 (SP205) 遺物出土状況 (南東から)



SB07 (SP205) 土層断面 (南東から)

図版 8



SD04 完掘状況（北東から）



SD07 遺物出土状況（北西から）



SK08 遺物出土状況（南から）



SK15 遺物出土状況（南西から）



SK04 焼土出土状況（北西から）



SK05 遺物出土状況（南西から）



SK10 遺物出土状況（西から）



SK23 土層断面（西から）

図版 10



SK25・SK26・SK27・SD07 挖込状況（南東から）



SK27 遺物出土状況（南西から）



SK27 遺物出土状況（西から）



SK27 遺物出土状況（東から）



SK27 遺物出土状況（西から）



SP040 遺物出土状況（南西から）



SP055 遺物出土状況（南東から）



SP185 遺物出土状況（東から）

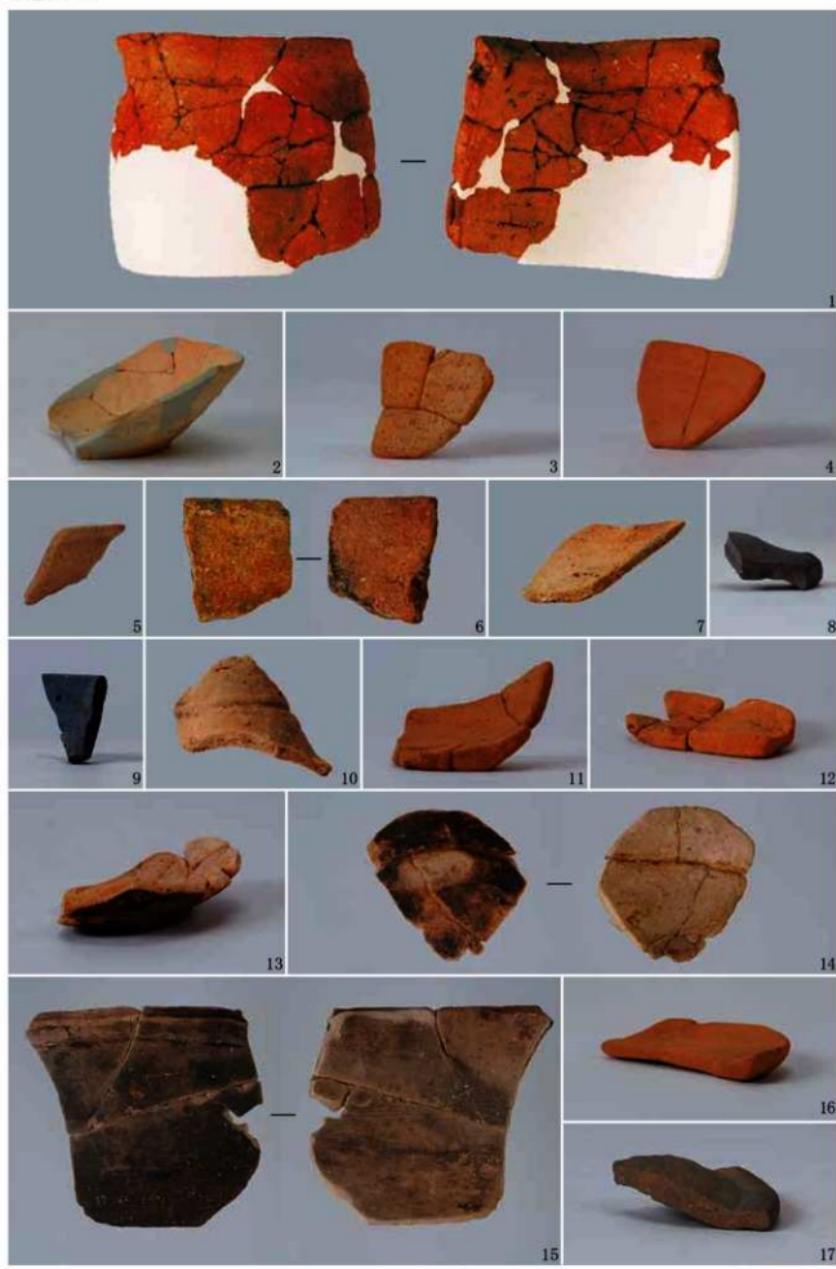


SP198 遺物出土状況（東から）



SP239 遺物出土状況（南西から）

图版 1 2



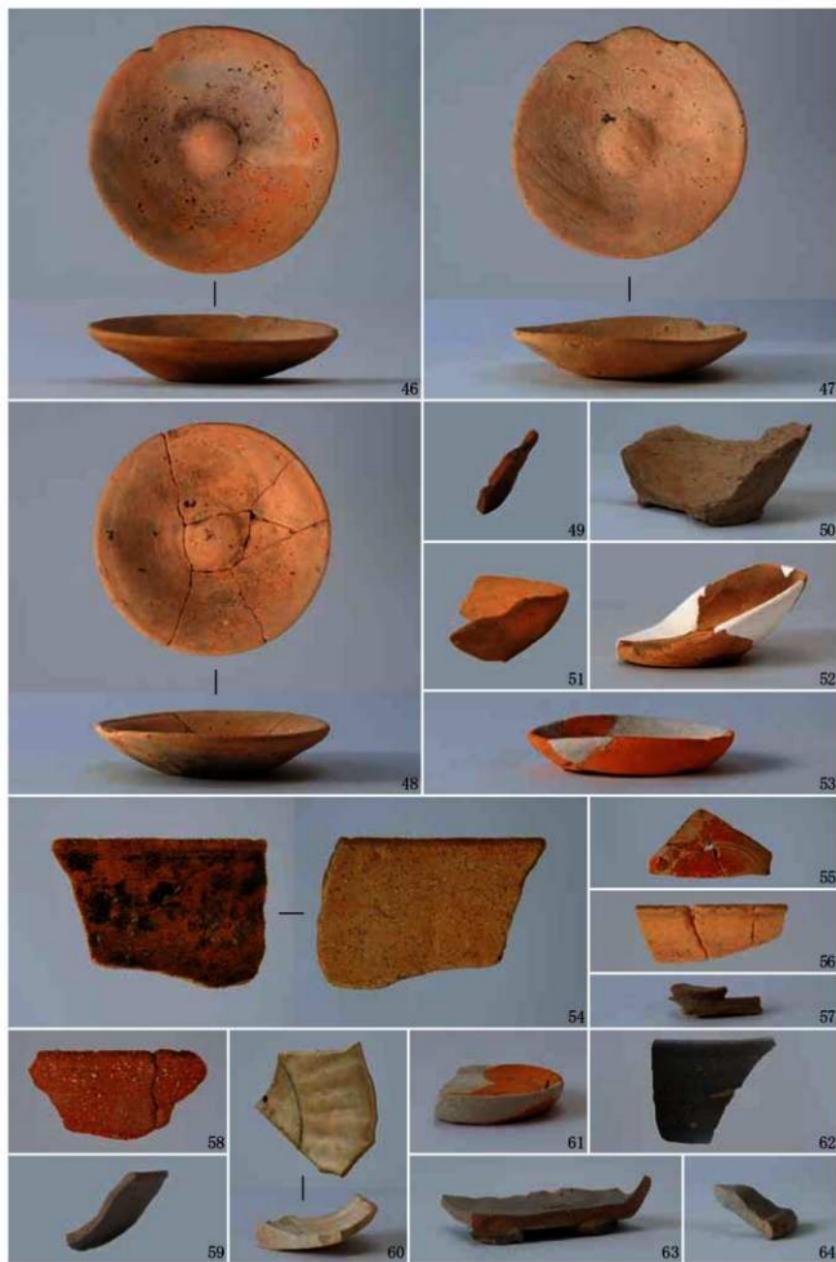
出土遗物①



出土遺物②



出土遺物③



出土遺物④

图版 16



出土遗物⑤



出土遺物⑥

图版 18



出土遺物⑦

報告書抄録

ふりがな	なかこいじいせき2
書名	中恋路遺跡2
副書名	
卷次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第87集
編著者名	米澤昭信 上田克也 岩崎麻衣子
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL083-923-1060
発行年月日	西暦2014年3月25日（平成26年3月25日）

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中恋路遺跡	山口県 山口市 宮野下		352039	34° 11' 18"	131° 30' 08"	第一期 20130507 ～ 20130829 第二期 20131112 ～ 20140127	2,180	県道整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
中恋路遺跡	集落	古墳 古代 中世	堅穴建物跡 掘立柱建物跡 土坑 溝 柱穴	1棟 9棟 30基 8条 506個	縄文土器 須恵器 中世土器 瓦質土器 輸入陶磁器 等	

要約	中恋路遺跡は、山口市北東部の宮野盆地にあり、椹野川左岸地域に広がる、標高約43mの谷底平野上に位置する集落遺跡である。今回の調査では、古墳時代の堅穴建物跡、古代・中世の掘立柱建物跡、土坑、溝などが検出された。出土遺物は、古墳時代中・後期のものと思われる土師器や須恵器、古代・中世の土師器、瓦質土器、輸入陶磁器などである。また、古代の掘立柱建物は、棟方向や出土遺物から、条里制に伴うものであり、大型の建物は、柱穴の形状や柱痕跡の配置から当時の有力者の建物であったことがうかがえる。また、中世の掘立柱建物は、柱穴からの出土遺物や、周辺の遺構から出土した京都系土師器皿などの遺物から、大内氏との関連があるものと考えられる。
----	--

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第87集

中恋路遺跡2

2014年3月25日

編集・発行 公益財団法人 山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号

印 刷 泉菊印刷株式会社

〒752-0927 山口県下関市長府扇町8番48号



H25 中恋路遺跡III地区遺構配置図